

訳注『大慧普覚禪師法語〈統〉』（上）

石 井 修 道

『大慧普覚禪師法語〈統〉』の訳注にあたって

筆者は『大乘仏典 中国・日本篇12 禪語録』（中央公論社、一九九二年一月・中公本と略称す）に『大慧普覚禪師法語』の現代語訳と注を収めた。その『法語』とは、筆者の解説の〈テキスト〉の分類に従うならば、「甲 三十卷本大慧普覚禪師語録」に所収される「D 卷一九〇二四 法語」の全訳である。同じく甲の中の「E 卷二五〇三〇 書」が『大慧書』として別行され、大慧宗杲（一〇八九—一一六三）の著作の中で最も流布したものと同一編集になるものである。「書」の編集本はこの「E」で全てであるが、「法語」は「丙 四卷本大慧普覚禪師普説」の巻四に二五の法語が付録されている。『大慧普覚禪師法語〈統〉』とは、この「普説」の付録を指す。中公本の法語数は、四〇であるから、ここに二回に亘って訳注を収めようとする法語に連続番号を付すならば、四一〜六五となる。ただし、（四六）の長文の「示張提刑暘叔」の法語は、『大慧書』と重複しているのので、訳注は省略することにする。中公本にこの四一〜六五の法語も訳注して収める計画もたてたが、分量と時間の制約のためにできなかったものである。

中公本の解説にも記しておいたが、「法語」の訳は、課外ゼミで筆者の原案の試訳を検討することで成立したものである。原案の誤読が少しでも減ったとすれば、参加者のおかげであり、特に外国語部講師の小川隆氏の助言によるところが多い。「法語〈統〉」についても、同じ方法で訳を進め、終始小川隆氏に補正していただいた。この追加によって大慧の「法語」の全てに訳注が完成することになる。試訳の検討中において、疑問の箇所がなかった訳ではなく、依然として保留の所もある。中

公本は全集の性格上、原文がないので、対照するには不便であるが、この論文では原文を付したので、読者からできるだけ多くの指摘を受けて、今後の訳注研究に活かして行きたいと考えている。テキストの底本も、中公本は大正蔵経巻四七所収本であるから比較の見やすいが、「法語〈統〉」のテキストの底本は、卍字蔵経二編三一一套五冊所収本であり、一般には入手しがたいものである。その意味でも、原文があることは便利であると思われる。

なお、中公本を野口善敬氏にお送りしたところ、次のようなお手紙をいただいた。

一つだけ気になりましたのは、五〇四頁のテキストの説明の所で、丙の四巻本大慧普覚禪師普説が卍字蔵経にありとされながら、五〇六頁では「基本的には甲のCの『普説』とは内容を異にする」とされている点です。御存知のように卍字蔵経本の『普説』は巻五に甲の「普説」を加えた五巻本の体裁を取った本です。もちろん卍字蔵経本および底本となった正保三年の和刻本の巻頭の題目には巻五の表記はありませんが、和刻本は扉の標題に巻五と書いてありますし、卍字蔵経本は版心に巻五と入れてあります。ですから知らない人が見たら、奇異な感じを受けるのではないのでしょうか。もっとも、五〇六頁の終わりに紹介してあります先生の「大慧語録の基礎的研究（上）」を見ればわかることなのでしょうが。

ご指摘に感謝すると共に、奇異な感じを与えたとすれば、説明不足を反省しなければなりません。「法語〈統〉」の底本ともかわるので、指摘の点を補足するならば、卍字蔵経に所収の大慧の著述類は次のようになる。

- ① 十二巻本『大慧普覚禪師語録』 二編三一一套四冊
- ② 五巻本『大慧普覚禪師普説』

(イ)四巻本『大慧普覚禪師普説』 二編三一一套五冊

(ロ)一巻本『大慧普覚禪師普説上・下』 二編三一一套五冊

- ③ 一巻本『大慧普覚禪師法語』 二編三一一套六冊

- ④ 一巻本『大慧普覚禪師書』 二編三一一套六冊

このうち、①、②の(イ)、③、④を合わせれば、三十巻本『大慧普覚禪師語録』となり、大正蔵経巻四七所収本と同じ内容となるが、③の柱は「大慧法語巻六上・中・下」となり、④の柱は「大慧書問巻七」となっている。巻六、巻七は明らかに便宜上の数で、そのような版心の刊行本があるとは考えられない。大正蔵経本の巻数に合わせれば、②の(ロ)、③および④が各六巻

である。さらにその底本の系統は、①が音釈を付した明藏本の系統を承ける黄檗版であり、この①のみ「慧日禪師臣蘊聞上進」の形態を取るが、②の(ハ)、③および④は浄智居士黄文昌重編の別行本であり、卍藏経本はすべて江戸時代に開版する時に返り点と送りがないを付したものを承けるのである。これを筆者の分類で「甲 三十卷本大慧普覚禪師語録」の別行本が存在すると言ったが、①にも黄文昌重編の別行本は存在するのに、卍藏経本は①だけは別行本を底本にしていない。甲の三十卷本のすべてが卍藏経本では別行本でないもので、その点は注意を必要がある。②の(ハ)とは、野口氏が指摘するように、四八九丁右より五〇一丁右までが版心に「大慧普覚禪師普説卷五上」とあり、五〇一丁右より五〇九丁左までが版心に「大慧普覚禪師普説卷五下」となっている。②の(ハ)は、筆者の分類では「丙 四卷本大慧普覚禪師普説」に当る。三九五丁右より四一七丁左上までが巻一、四一七丁左上より四四一丁左上までが巻二、四四一丁左上より四六五丁左上までが巻三、四六五丁左上より四八八丁左下までが巻四となっている。巻四のうち四八一二丁右上の一行目で「大慧普覚禪師普説終」となり、つづいて「大慧普覚禪師法語」が付録される。この訳注は、卍字藏経本でいえば、四八一二丁右上より四八八丁左下の「普説」巻四の終りまでとなるのである。但し尾題は付録を承けて「大慧普覚禪師法語」となる。②は五卷本の体裁を取ったことは筆者の論文で述べてはいったが、一巻本は覆宋版の五山版が松本文三郎文庫にあつて、そのコピーを所蔵しているだけである。その後の和刻本は、駒沢大学図書館には、黄檗版の一切経印房武兵衛の刊行本しかない。野口氏の指摘する四卷本でない正保三年の和刻本の「普説」は筆者は未見なので、野口氏の言うごとく、和刻本の扉に巻五と書いてあると言うのを信ずれば、卍字藏経以前に五卷本普説が存在したか、五卷本普説の編集本が存在したことになろう。この点は今後に検討したい。

この訳注の論文は、先にも言うごとく、読者より多くのご指摘を賜わり、今後の訳注に活かす覚悟である。どうか諸先生方のお教えを賜りたい。

- (1) 『大慧普覚禪師普説』については、石井修道「大慧語録の基礎的研究（上）」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三十一号、一九七三年三月）で取り上げた。その中にも黄檗版は正保年間版の後刷と想像しておいた。『新纂禅籍目録』（駒沢大学図書館）二八九頁の「普説」の項は四卷本と一巻本が混同されている。この一巻本はハの四卷本である正保三年本の後刷とするのは誤りである。

訳注凡例

一、本文の校訂に使用した四巻本『大慧普覚禪師普説』のテキストは、次の三種である。

底本 卍字藏経本 二編三一套五冊 (正) と略称す

校訂本 (イ) 五山版 東洋文庫所蔵 (東) と略称す

(ロ) 正保三年京都田原仁左衛門刊 駒沢大学図書館蔵 (正) と略称す

川瀬一馬著『五山版の研究』(日本書籍商協会、一九七〇年三月)によると、四巻本『普説』の五山版の完本は、大東急記念文庫と東洋文庫の二箇所所蔵されていると言う。筆者は東洋文庫本の複写本しか所有していない。当然、この五山版を底本にすべきだと思われるが、残念ながら四巻目にまま磨滅がある。卍字藏経本は、正保三年本を承けるものであり、正保三年本は五山版を承けている。卍字藏経本は、結局、五山版と同一系統の版であるから、五山版によって底本の誤植を指摘して校訂本を作成する手続きを取りたい。

一、訳注に当って、石井修道訳注『大慧普覚禪師法語』(前掲書)(中公本と略称す)および荒木見悟訳注『大慧書』(筑摩書房、一九六九年五月)(荒木本と略称す)の関連をできるだけ多く記した。

一、元来、目次はないが、中公本と同じく新たに加え、中公本につづく四一〜六五の通し番号を付した。ただし、(四六)の「示張提刑陽叔」は『大慧書』と重複するので、この論文の訳注は省略した。

一、訳文中の(一)内は、原文にない補足や説明の語句である。大慧宗果については、中公本の「解説」を参照されたい。

大慧普覚禪師法語〈続〉目次

(四一) 沈通判に示す

(四二) 王通判大任に示す

(四三) 徳之居士に示す

(四四) 湛然居士に示す

(四五) 幻住道人に示す

(四六) 張提刑陽叔に示す (訳注省略)

(四七) 空相道人浄円に示す

(四八) 了然居士に示す

(四九) 妙明居士黄子余に示す

(五〇) 覚明居士夏運使に示す

(五一) 陳鼎丞元霧に示す

(五二) 華嚴居士周子充に示す

（五三）湛然居士趙都監獻之に示す

〈以上本号、以下次号予定〉

（五四）了空居士衛寺丞に示す

（五五）等觀居士廖司戸季繹に示す

（五六）妙德居士に示す

（五七）張通判晋彦に示す

（五八）王主簿仲隱に示す

大慧普覺禪師法語（統）^①

（四一）沈通判^③に示す

（一）決欲荷擔此事、須是渾鋼打就生鐵鑄成底大聰明過量漢。然用著一毫毛許聰明、則無擔荷分。蓋聰明之士、理性通達、以思量計較爲窟宅、常在情識中出沒。纔見宗師開口動舌、便將情識擲量、引文字作證、要說教有下落、以故昧却腳跟下事。而入決定要超越、先須杜絕理路思想不行、一點聰明莫拈出。如初生孩兒、雖情識俱備、而六用不行、觸境遇緣、如聾若啞。苟實得如此、不可只恁麼便以爲

- （五九）方察推宋輔に示す
（六〇）蘇宣教少連に示す
（六一）蘇知鼎明甫に示す
（六二）仏照居士鄭提幹に示す
（六三）宗一禪人に示す
（六四）璉禪人に示す
（六五）銛・遠二禪人に示す

參学 道 先 録^②

決して此の事を荷担せんと欲せば、須らく是れ渾鋼打就生鉄鑄成する底の大聰明過量^⑥の漢なるべし。然も一毫毛許りの聰明を用著せば、則ち担荷の分無し。蓋し聰明の士は理性通達^⑦し、思量計較を以て窟宅と爲し、常に情識の中に在りて出沒^⑧す。纔に宗師の口を開き舌を動かすを見ては、便ち情識を將て擲量し文字を引いて証と作し、説いて下落有らしめんと要して故を以て脚跟下の事を昧却す。入決定して超越せんと要せば、先づ須らく理路思想を杜絶して行かず、一点の聰明の拈出すること莫かるべし。初生の孩兒の如く情識俱に備ると雖も、六用を行ぜず、境に触れ縁に遇い、聾の如く啞の如くす。苟し実に此の如きを得ば、只だ恁麼に便ち以て是と爲すべからず。直須らく猛く精神を著け、身を転じて一擲躍して太虚を過すべし。此の時に當って儘に聰明を用い、儘に道理を説くとも都て相

是。直須猛著精神、轉身一擲躍過太虛。當此之時、盡用聰明、盡說道理、都不相妨。借聰明道理助發揮之。若未得如是、觸目遇緣、且暫將作聰明說道理底、一時放下。只就這裏、看箇話頭。僧問大愚、如何是佛。愚云、鋸解秤鎚。此一句子上、選用得聰明說得道理麼。若也佇思停機、作一星伎倆、則又是蹉過脚跟下事也。是故從上先聖、如臨濟德山用處、不入理路、不涉言詮、不貴聰明、不誇作略、不存機境、不顧是非、生死場中、當門按劍。不可觸犯、不可測量。不問凡聖賢愚、入門便棒、入門便喝。如天之忽雷閃電未收霹靂。隨至懵懂之流、如何湊泊。正恁麼時、且去默然靜坐、坐教鼻孔裏無出入息、然後緩緩起來、與這兩箇老漢相見得麼。

(2) 近日有一種剃頭外道。心地黑如漆、自無眼目、不見先德用處、錯會古人轉身一路、認語言爲實法、以悟爲落在第二頭、以棒喝爲石火電光邊事。生死岸頭、便不著你不妨會得好。真是龍象蹴踏、非

妨。聰明道理を借りて助けて之れを發揮す。若し未だ是の如きを得ざれば、目に触れ縁に遇つて、且つ暫く聰明を作して道理を説く底をもつて一時に放下せよ。只だ這裏に就いて箇の話頭を看よ。僧、大愚に問う、「如何なるか是れ仏」。愚云く、「鋸解秤鎚」⁽¹⁶⁾。この一句子の上、還た聰明を用い得て道理を説き得るや。若也し佇思停機して一星の伎倆を作さば、則ち又た是れ脚跟下の事を蹉過するなり。是の故に従上の先聖、臨濟・德山の用處の如き理路に入らず、言詮に涉らず、聰明を貴ばず、作略を誇らず、機境に存せず、是非を顧みず、生死場中、當門に劍を按ず。觸犯すべからず、測量すべからず、凡聖賢愚を問わず、門に入れば便ち棒し、門に入れば便ち喝す⁽¹⁹⁾。天の忽雷閃電の未だ霹靂を収めざるが如し。懵懂の流に随至して如何が湊泊せん。正に恁麼の時、且く去つて默然として静坐し、坐して鼻孔裏をして出入の息を無からしめ、然して後に緩緩に起來して、這の兩箇の老漢と相見し得てんや。

近日、一種の剃頭の外道有り。心地の黒きこと漆の如し、自ら眼目無く、先徳の用處を見ず、錯つて古人の轉身の一路を會して、語言を認めて実法と爲し、悟を以て第二頭に落在すと爲し⁽²⁰⁾、棒喝を以て石火電光辺の事と爲す。生死岸頭に便ち你に不妨に會得すれば好きことを著せず。真に是れ竜象の蹴踏、驢の堪えるところにあらず⁽²¹⁾。此の輩更に妙悟有るを信ぜず。只だ默然を以て極則と爲し、自己

驢所堪。此輩更不信有妙悟。只以默然爲極則、將自己之愚、要愚他一切人。直是耐耐。所謂自嗜臭腐、而養鵝鶩以死鼠。可不悲哉。

（3）沈文伯、天下士、與予素昧平生。

紹興庚申冬、因爲衆持鉢過其廬。一見傾倒、便如二十年故舊。相忘形器之外、相期于物之初。文伯留心此段因緣、積有年矣。以透脫生死爲決定義。故邪說不能亂其神、亦不肯向黑山下鬼窟裏作活計。

（4）臨別以此紙求指示、見其志誠、不敢自外。信筆書、此以塞來命。異日於鋸解秤鎚上、得些滋味、憑此以爲券約。庶幾發再會時一笑也。

（1）なんとしてもこの事を担おうと望むならば、鍛えぬかれた鋼や鋳あがられた生鉄のような、大聡明の破格の人でなければならぬ。だが、毛筋ほどの聡明さを用いたとたん、それを担う資格は無い。聡明な者はとかく理がかち、思量や推量を窟宅として、いつも凡夫の意識のなかで右往左往している。それで宗師が口を開き舌を動かすのを見るや、凡夫の意識で推量し文字を引いて証明とし、自分の説く法に落ち着き場所を持たせようとして、それ故に脚下の事を見失ってしまうのである。もしぎつぱりとしたところに入り超越せんと思うならば、論理や思慮をすっかり絶って働かせず、わずかな聡明も取り出さぬようにせねばならぬ。生まれたばかりの赤子のように、意識を充分に備えていながら六根の用を働かせず、日常の営為に出会っても、聾啞の人のごとくでなければならぬのである。だが、もし本当にこのようになることができたなら、今度は、ただこれだけで好いと思ひ込んではいならない。猛烈に奮起して身を転じ大空を一つ躍びせねばならぬのだ。この時になれば、どんなに聡明

の愚を將て他の一切の人を愚ならしめんと要す。直に是れ耐耐なり。謂わゆる自ら臭腐を嗜めて鵝鶩を養うに死鼠を以てす。悲しまざるべけんや。

沈文伯は、天下の士、予と素より平生に昧し。紹興庚申の冬、因みに衆の爲に持鉢して其の廬に過す。一見傾倒して便ち二十年の故旧の如し。形器の外に相忘れ、物の初めに相期す。文伯は心を此の段の因縁に留め、積んで年有り。生死を透脱するを以て決定の義と爲す。故に邪説のその神を乱す能わず、また肯って黑山下鬼窟裏において活計を作さず。

別れに臨んで此の紙を以て指示を求め、其の志誠を見て敢えて自外せず。筆に信せて書き、此を以て来命を塞ぐ。異日、鋸解秤鎚の上において些の滋味を得てこれに憑つて以て券約を爲す。庶幾くは再会の時一笑を發せん。

を用いてもどんなに道理を説こうとも全く構わぬ。聡明や道理の助けを借りて展開すればよいのだ。だが、もしこのようになることができないならば、日常の営為の中で、まずは聡明をなし道理を説くものを一気に放り出してみよ。ここでこそ専ら一つの次の話を取り上げてみるのだ。僧が大愚に問う、「仏とは何か」。大愚、「鋸のこぎりで分銅を切る」。この一句の上に、聡明を用い道理を説くことができるか。もし途方にくれてわずかの小細工でもなさうならば、またしても脚下の事とすれ違ふことになる。だから、今までのすぐれた先人たち、たとえば臨済・徳山のごときはたらきにおいては、理路に入らず、言詮に涉らず、聡明を貴はず、作略を誇らず、相手の機境に左右されず、是非を顧みることなく、生死の真ただ中で、真つ正面に剣を構えた。それを犯すことも、推量することもできない。彼らは凡聖や賢愚にかかわらず、門に入るや棒で打ち、喝！と怒鳴ったのである。そのさまは、突如、稲妻が走ってなお雷鳴を聞かぬ間のようなものであった。ぼんやりした連中に随つてどうしてこれに近づけよう。正にこのような時、まずはだんまりと静坐し、坐したままで鼻の孔の出入の息を止め、その上でやおらゆっくりと起ち上がるようでは、この二人の老漢と相見することができようか。

(2) 近頃、ある剃髪の外道がいる。心の中は漆のごとく真つ黒、眼はふしあな、先徳の働きを見ず、古人の転身の一路を誤解して、言語を実法とみなし、悟りを第二義のものと思い込み、棒喝を一刹那の石火電光のごときものにすぎぬとしている。生死の崖淵で、大いに会得することをさせない。正しく「巨象の強い歩みは、驢馬ではたちうちできない」と言うやつだ。こいつらは思議の及ばぬ悟りが有ることを信じない。ただ黙然だんまじを究極とし、自己の愚かさで他の一切の人を愚かにしようとするのである。実に腹だたしいことだ。自分が腐肉を好むからといって死んだ鼠で鳳凰を養おうと思うようなものだ。なんと悲しいことか。

(3) 沈文伯は、天下の士である。わたしとはもともと見知らぬ仲であったが、紹興庚申(一一四〇)の冬、大衆の為に托鉢して彼の廬を通り過した折、一見してすっかり心を許し、二十年來の旧知のようになった。現象の世界では互いを忘れ、根源においての出会いを互いに約束しあったのである。あなたはこの大事の因縁に心を留め、年数を経過し、生死を透脱なみだりすることをもってはっきりとした目的とした。そのために邪説も彼の心を乱すことはできないし、また黒山の鬼もろりようの住処なりわいの中で活計なりわいをすることは絶対でない。

(4) 別れに臨んでこの紙をもって指示を求めたので、その志の誠実を見て、断わることもなく、筆に信せて書きつらね、せ

めをふさいだ。将来、「鋸で分銅を切る」という件くだんの話頭の中から、いささかの滋味を得た時には、この一紙を証文として、再会の時のお笑いぐさといったそう。

- (1) 大覚普覺禪師法語（續） 諸本に（續）の字はないが、前文に示すように、中公本につづく訳注としたので、仮にここでは付した。
- (2) 参学道先録 中公本に指摘したように黄文昌重編本の『法語』は、参学道先録となっている。諸本の四卷本『普説』のこの箇所に、この記録者の名はない。四卷本『普説』の卷一は「参学慧然・蘊聞録、小師祖慶校勘」とあり、卷二・三・四に「参学道先録」とあることから、この法語が四卷本『普説』巻四の付録であるので、ここに巻四の記録者として新たに加えたものである。道先については伝記は不明である。中公本の注（2）参照。
- (3) 沈通判 法語中に沈文伯とある。沈長卿（？—一二六〇）、字は文伯。審齋居士と号す。帰安（浙江省興興県）の人。母は錢氏（一〇七八—一一四二）。建炎二年（一一二八）の進士。臨安府觀察推官、婺州州学教授、秘書省正字および左朝奉郎主管台州崇道觀となる。『西漢総類』一六卷の著がある。『宋人伝記資料索引』（鼎文書局、一九七六年、以下「索引」と略称す）卷一—六九三頁参照。『索引』卷一—六八一頁に、沈棐、字は文伯。湖州の人。『春秋此事』二〇卷の著あり、とあるが別人である。ここは沈長卿のことであろう。この法語が書かれた年は不明。
- (4) この事 禪で説く究極のこと。大慧はこの語をしばしば使用する。中公本「（一）（大正藏卷四七—八九〇b、以下、大と略称す）」や「（一八）（大九〇三a）」に同様の説があり、語意については九九頁および注（30）参照。
- (5) 渾鋼打就生鉄鑄造する底 中公本一七〇（大九〇三b）、二四一頁（大九一六a）、荒木本一八六、一八七頁に同語がある。
- (6) 過量 中公本一八五（大九〇六a）、二二八頁（大九一三a）にも出づ。
- (7) 理性通達 原則的な理論に陥ること。後の注（11）参照。
- (8) 情識 中公本一〇三頁（大八九一a）にも出づ。
- (9) 下落 中公本一三八（大八九七b）、二二九頁（同c）などに出づ。
- (10) 脚跟下の事 足のかかとが地についた重大事。中公本一〇六頁（大八九一c）に脚跟下について詳説する。
- (11) 理路思想 中公本一〇三頁（大八九一a）にも出づ。
- (12) 六用 六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）のはたらき。八地以上は六根互用するという。
- (13) 境に触れ縁に遇い 中公本一〇一（大八九〇c）、一九九頁（大八九四a）などに出づ。
- (14) 猛く精神を著け 中公本一〇五頁には「抖擞精神」（大八九一c）とか、一三〇頁には「猛著精彩」（大八九六a）の語がある。
- (15) 儘に どれほど……しようにとも、の意。
- (16) 僧、大愚に……中公本二三三頁（大九一四c）および注（572）参照。（東）は「鎚」を「槌」に作る。

(17) 佇思停機 思案にくれて判断停止すること。荒木本一二〇頁にも出づ。

(18) 蹉過 すれ違ふこと。中公本一〇六頁(大八九一c)にも出づ。

(19) 門に入れば…… 徳山の棒、臨濟の喝をさす。中公本一一五頁(大八九三b)および注(134)参照。大慧がよく引用する。

(20) 悟をもって…… しばしば大慧が黙照那禅の攻撃のときに使用する語。中公本一二一頁(大九〇一c)にも同じ語があり、前後の主張も同じである。

(21) 竜象の…… 『維摩經』の「不思議品」(大正藏卷一四一五四七a)による。中公本二二八頁(大九一四a)に出づ。

(22) 耐耐 荒木本五〇頁に出づ。

(23) 自ら臭腐を…… 福永光司訳注『莊子 外篇中』(『秋水篇』(朝日文庫、一九七八年)二二四頁による。

(24) 傾倒 中公本一九三頁(大九〇七b)に出づ。

(25) 黒山下鬼窟裏…… 中公本一〇八(大八九二a)、一二六(大八九五b)、一六二頁(大九〇一c)および注(95)などに多出す。

(26) 滋味 荒木本一六三頁に出づ。中公本一一〇頁(大八九二b)では、「没滋味」として、むしろ滋味は否定されている。

(27) 券約 中公本一八三頁(大九〇五c)に「契券」とあるが、同じ意味であろう。

(四二) 王通判大任⁽¹⁾に示す

(1) 士大夫學道、不出二種歧路。一曰忘懷、一曰著意。所謂著意者、杜撰長老、喚作管帶是也。忘懷者、杜撰長老、喚作默照是也。管帶默照二種病不除、則不能出生死。所謂生死者、本無形段。只爲學道人生死心不破、故受輪回。若生死心破、則輪回之性、卽是解脫之場。然輪回解脫、悉是假名、亦無形段可得。若能於日用中、常如是觀察、則日久月深、無有不得底。

士大夫の学道は二種の歧路を出です。一を忘懷と曰い、一を著意と曰う⁽²⁾。謂わゆる著意とは、杜撰の長老、喚んで管帶と作すは是れなり。忘懷とは、杜撰の長老、喚んで默照と作すは是れなり。管帶、默照の二種の病を除かざれば、則ち生死を出ること能わざるなり。謂わゆる生死とは、本と形段⁽³⁾無し。只だ学道人の生死の心の破せざるが爲の故に輪回を受く。若し生死の心破すれば、則ち輪回の性は即ち是れ解脫の場なり。然も輪回解脫は、悉く是れ仮名なり。また形段の得べき無し。若し能く日用の中において、常に是の如く觀察せば、則ち日久月深して得ざる底有ること無し。

（2）昔達磨謂二祖曰、汝但外息諸緣、內心無喘、心如牆壁、可以入道。二祖種種說心說性、引文字作證、並不契達磨意。前所云忘懷著意、正謂此也。若不著意、則諸緣息矣。若不忘懷、則內心定矣。內心定、則自然與牆壁無殊、亦不著將心安排計度、然後得如牆壁也。但只就疑不破處參。參時切忌將心等悟。若將心等悟、則沒交涉矣。

（3）生死心未破、則全體是一團疑情。只就疑情窟裏、舉箇話頭。僧問趙州、狗子還有佛性也無。州云、無。行住坐臥、不得間斷。妄念起時、亦不得將心遏捺。但只舉此話頭。要靜坐、纔覺昏沈、便抖擻精神、舉此話。忽地如瞎老婆吹火和眉毛眼睫一時燒了。不是差事。得如此了、忘懷也得、著意也得、靜也得、鬧也得。雖全體在輪回中、亦不被輪回所轉、借輪回、爲游戲之場。得到這箇田地、亦不著將心和會、自然成一片矣。却將三教聖人所說之法、從頭試看一遍。盡說自家屋裏事、更無一字增減。若不如是、縱勤苦修

昔、達磨、二祖に謂いて曰く、「汝、但だ外に諸縁を息め、内心喘ぐ無く、心は牆壁の如く、以て道に入るべし」。二祖は種種に心と説き性と説き、文字を引き証と作す。並に達磨の意に契わす⁽⁴⁾。前に云うところの、忘懷と著意とは正にこれを謂うなり。若し著意せざれば、則ち諸縁息む。若し忘懷せざれば、則ち内心定まりぬ。内心定まれば則ち自然に牆壁と殊なること無し。亦た心を將て安排計度を著わさず。然して後に牆壁の如くなることを得るなり。但だ只だ疑いの破れざるところについて參ぜよ。參の時に切に忌む心を將て悟を等つ⁽⁵⁾ことを。若し心を將て悟を等てば、則ち沒交涉なり。

生死の心を未だ破せざれば、則ち全体はれ一団に疑情なり。只だ疑情窟裏に就いて箇の話頭を拏せよ。僧、趙州に問う、「狗子に還た仏性有りや」。州云く、「無」。行住坐臥、間斷することを得ざれ。妄念起こる時、亦た心を將て遏捺⁽⁶⁾を得ざれ。但だ只だ此の話頭を拏せよ。靜坐せんと要せば、纔に昏沈を覺えば、便ち精神を抖擻⁽⁷⁾して此の話を拏せよ。忽地に瞎老婆の火を吹いて眉毛に和して眼睫⁽⁸⁾を一時に焼了するが如し。是れ差事ならず。此の如く了んことを得ば、忘懷も得し、著意も得し、靜も得し、鬧も得し。全体輪回の中に在ると雖も、亦た輪回の所転を被らず、輪回を借りて游戲の場と爲る。遮箇の田地に到ることを得るとも、亦た心を將て和會すること著せず、自然に一片を成ぜん⁽⁹⁾。却た三教の聖人の所説の法を將て從頭より試に看ること一遍せよ。尽く自家屋裏の事を説いて更に一字の増減も無し。若し是の如くならずんば、縦い勤苦修行すること塵沙劫を経て、此の事を明らめんと欲すも、徒に自ら疲勞するのみ。忘懷著意、二俱に蹉⁽¹⁰⁾過す。忘懷せず著意せざるは是れ箇の甚麼ぞ。咄⁽¹¹⁾。更に是れ箇の甚麼ぞ。大任通

行經塵沙劫、欲明此事、徒自疲勞。忘懷

判學士、但だ恁麼に參ぜよ。此の外別に道理なし。

著意、二俱蹉過。不忘懷不著意、是箇甚麼。咄。更是箇甚麼。大任通判學士、但

恁麼參。此外別無道理。

(1) 士大夫の學道は、二種の岐路を出ない。一を忘懷と言ひ、一を著意と言う。ここに言う著意とは、杜撰の長老が管帶(精神の集中)と呼ぶものであり、忘懷とは、杜撰の長老が默照(沈黙のさとり)と呼ぶもののことである。管帶と默照のこの二種の病を除かなければ、生死きんぎを出ることはできないのである。ここで言う生死には、もともと形体は無いが、道を学ぶ人が生死を打ち破らないで輪回を受けることになる。もし生死の心が打ち破られれば、輪回の本性がそのまま解脱の場となるのである。しかも輪回と解脱は、すべて仮りの名に過ぎないし、また形体をもつものではない。もし日常の営為の中で、常にこのように觀察することができれば、月日がたつうちに、獲得しないのものはないのである。

(2) 昔、達磨が二祖に言つた。「外の対象への心のはたらきを息めさせれば、内心が喘ぐことは無くなり、心が牆壁のごとくでありさえすれば、そのまま道に入ることができる」。二祖は種種に心を説き性を説き、文字を引いて証明としたが、いずれも達磨の意図と契わなかつた。前に言つた忘懷と著意とが正にこのことを言っているのである。もし著意しなければ対象へのはたらきは息むし、もし忘懷しなければ、内心が定まるのである。内心が定まればおのずと牆壁と同じくなるのである。また心によってとりはからつたり推量することがなければ、その後に牆壁のようになることができるのである。そこで、正しく疑いの打ち破れないそのところで参究してみよ。だが、参究する時に絶対に心をもつて悟を待つてはならぬ。もし心をもつて悟を待つてならぬ、關係ないことになってしまう。

(3) 生死の心がまだ打ち破れぬうちは、己はまるごと疑いのかたまりである。ただ疑いの意識あなぐちの窟くの中にあつて次の話頭を取り上げよ。僧が趙州に問う、「狗子に仏性が有るか」。趙州、「無」。この無の一字を行住坐臥の営為の中で絶えさせぬようにせよ。妄念が起こつた時、心をもつて押さえつけようとせず、ただこの話頭だけに取り組むのだ。静坐しようとする時も、心が沈み込んだとたんに、奮起してこの話を取り上げよ。盲目の老婆が火を吹きおこす時のように瞬時に己が眉毛とまつげを焼き尽くすようになったとて、あやしむにはたらぬ。このように了解できてしまえば、忘懷(無意識)もよし、著意(興奮)も

よし、静かもよし、騒がしいのもよいのである。まると輪回の中に在りながら、輪回到に転ぜられず、むしろ輪回をそのまま遊戲の場とすることができるのである。この田地に到ることができたとしても、心をもってピタリと一つに、合わせようとしないともおのずと一枚と成るのである。さらに三教の聖人の説く教えを始めから一通り読んでみよ。すべて自分自身の事を説いて一字の増減もすべきものがないのである。もしもこのようにならなければ、たとい永遠の期間にわたって苦しい修行をしてこの事を明らめようと望んでも、無駄な疲労に陥るだけである。忘懷と著意とは二つ俱にすれがよいである。では忘懷せず著意しないとすれば、何であるか。咄！一体、それは何か。大任通判学士よ、ただこのように参究せよ。この外に別の子細はないのだ。

- (1) 王通判大任 伝記もいつの法語かも不明。
- (2) 一を忘懷…… 忘懷と著意については荒木本一一三頁、管帶と默照については荒木本一九頁参照。ここは二種の禪病について最も整理された法語である。中公本解説四八二頁以下参照。
- (3) 形段 六道に輪回する凡夫の生死を分段生死という。迷いの為に形体が段階的に別々となるのである。中公本『裴休拾遺問』八六〇八七頁および注(251)参照。
- (4) 昔、達磨…… 荒木本二七、八五、二二五頁に出づ。元来、『景德伝燈録』卷三菩提達磨章（禪文化研究所刊『福州東禪寺宋版景德伝燈録』三三頁）による。
- (5) 悟を等つ 中公本一〇五頁（大八九一b）および注(68)参照。大慧の禪の特色を「待悟禪」というが、意識的な待悟を認めた訳ではないので注意すべき用例であろう。同じ用例は中公本一三九（大八九七c）、一六三頁（大九〇二a）および荒木本一五、一六、四八、五〇、六八、七六、一四一、一五四、二二六、二三〇頁などに出づ。
- (6) 僧、趙州に問う 無字の公案と呼ばれ、大慧が多用するもの。中公本注(66)および解説四九〇頁以下参照。
- (7) 遍捺 中公本一四二頁（大八九八a）や荒木本九二頁の按捺に同じく、おさえつけること、荒木本一五五頁の玄沙の引用語の中に吐づ。玄沙の語は、入矢義高監修『玄沙広録 中』（禪文化研究所、一九八八年）二二二頁。
- (8) 精神を抖擻し 中公本一〇五頁（大八九一c）および注(69)参照。
- (9) 田地 境界のこと。中公本一〇二頁（大八九一a）および注(54)、一〇八頁（大八九二a）などに出づ。
- (10) 一片を成ぜん 中公本一二二頁（大八九四b）および注(167)参照。
- (11) 従頭 中公本一〇八頁（大八九二a）および注(93)参照。
- (12) 蹉過 中公本一〇六頁（大八九一c）および注(79)参照。
- (13) 咄 中公本一二七頁（大八九七b）および注(240)参照。

(四三) 徳之居士⁽¹⁾に示す

先聖有言、佛説一切法、度我一切心。我無一切心、何用一切法。又淨名云、直心是道場、無虛假故。若能於一切法中、不生情解、則法法自如。法法既如、則十二時中、觸境遇緣、如盲如聾、不執不著、不取不捨。正當恁麼時、不屬世間法、不屬出世法、不住有爲、不墮無爲。而於有爲無爲之間、成就世出世間種種佛事、始與無心之道、少分相應耳。老龐云、心如境亦如、無實亦無虛。有亦不管、無亦不拘。不是聖人、了事凡夫。徳之居士、但恁麼做工夫、不用別作道理也。

先聖は「仏があらゆる教えを説いたのは、あらゆる心を解脱せしめんが為である。だが、わたしには、あらゆる心などない。どうしてあらゆる教えが必要であらうか」といわれている。また、『浄名経』にも「素直な心が道場である、そこには虚偽がないからである」といつている。もしあらゆるものの中に凡夫の意識分別を生じないならば、一つ一つのものがすべてありのままなのである。一つ一つがありのままならば、日頃のすべての営為が、盲者のごとく聾者のごとく、執著もしないし、取捨もしないのである。正にこのような時に、世間の真理にも属することなく、出世間の真理にも属することなく、有為にも住せず、無為にも堕ちることはないのである。有為と無為の中で世・出世間の種種の仏事を成就すれば、そこで始めて無心の道といささかなりとも符合できるのである。龐居士も言っている。「ありのままの心には境もありのまま。実体もなければ空虚もない。有も相手にせず、無にも腰をすえぬ。賢人や聖者ではござらぬ、かたをつけた凡夫でござる」。徳之居士よ、ただ

先聖言えること有り、「仏の一切の法を説くは我が一切の心を度す。我に一切の心無し。何ぞ一切の法を用んや」⁽²⁾。また、浄名に云く、「直心是れ道場、虚仮なきが故に」⁽³⁾。若し能く一切の法の中に情解を生ぜざれば、則ち法法自如なり。法法既に如ならば、則ち十二時中、境に触れ縁に遇い、言の如く聾の如く、執せず著せず、取らず捨てざるなり。正當恁麼の時、世間法に属せず、出世法に属せず、有為に住せず、無為に墮せざるなり。而も有為無為の間に世出世間種種の仏事を成就して、始めて無心の道と少分相応するのみ。老龐の云く、「心如なれば境も亦た如なり、実もなく亦た虚もなし。有も亦た管せず、無も亦た拘せず。是れ聖人ならず、了事の凡夫なり」⁽⁴⁾。徳之居士、但だ恁麼に工夫を做せ。別に道理を作すことを用いざれ。

このように工夫をなせ。別に子細をなしてはならぬ。

- (1) 徳之居士 董仲永(一一〇六一一六五)、字は徳之。開封(河南省)の人。曾祖は居正、祖は之純、父は舜臣という。首都の南渡の後、昭慶軍承宣使となり、内侍省押班で終わる。乾道元年没す。世寿六二。曹勛撰「董太尉墓誌」(『松隱集』卷三六)に伝記あり。『索引』卷四一三二二〇頁参照。いつの法語か不明であるが、二人の交際からみて、大慧晩年のことであろう。
- (2) 先聖…… 中公本一〇〇頁(大八九〇c) および注(38) 参照。
- (3) 淨名に……『維摩經』菩薩品(大正藏卷一四一五四三c)による。
- (4) 無心の道 中公本一〇一頁(大八九〇c) 参照。
- (5) 少分相応 中公本一〇一頁(大八九一a) および注(46) 参照。
- (6) 老龍の云く…… 入矢義高訳注『龐居士語録』(筑摩書房、一九七三年)一八九頁による。荒木本八二頁にも出づ。

(四四) 湛然居士⁽¹⁾に示す

(1) 昔善財見最寂靜婆羅門、得誠語解脫。以是語故、行止無違。言必以誠、未嘗虛妄。無量功德、因之出生。於阿耨多羅三藐三菩提、無已退、無現退、無當退。於不退處、證幻住法門。乘幻住力、彈指開樓閣門。於樓閣中、得不忘念智莊嚴藏。以至入普賢毛孔刹、於一毛孔刹中、行一步、越不可說不可說佛刹微塵數世界。皆因誠願之力、而得成就。

(2) 湛然居士、於日用四威儀中、住寂靜地、常作是觀。予嘉其志氣不凡、精進勇猛、因以此軸求教誨、掇筆書此、以遺之。

昔、善財、最寂靜婆羅門に見えて、誠語解脫を得たり。是の語を以ての故に行止違ふこと無し。言は必ず誠を以て未だ嘗て虚妄ならず。無量の功德、之れに因つて出生す。阿耨多羅三藐三菩提において已に退くなく、現に退くなく、当に退くなし。不退の処に幻住法門を証す⁽²⁾。幻住の力に乗じて樓閣門を開く。樓閣中に不忘念智莊嚴藏を得たり⁽³⁾。以至普賢の毛孔刹に入り、一毛孔刹中に一行を行じ、不可說不可說仏刹微塵数の世界を越ゆ⁽⁴⁾。皆誠願の力に因つて成就することを得たり。

湛然居士、日用四威儀中に寂靜地に住して、常に是の觀を作せり。予、其の志氣の凡ならずして精進勇猛なるを嘉び、此の軸を以て教誨を求めるに因つて、筆を掇つて此を書して以て之れに遺す。

(1) 昔、善財童子は最寂靜婆羅門に出会って誠語解脱を獲得した。この誠願語により、行為は誤ることなく、言葉は必ず誠実で、虚妄になることはなかった。それで無量の功德が生まれ出たのである。この無上菩提において、後退したこともなく、後退していることもなく、後退しようとするということもないという、この後退のないところで幻住法門を悟ったのである。そこで幻住三昧の力をもって指を弾くと椽閣の門が開き、椽閣に入ると、その中では不忘念智莊嚴蔵が獲得された。そして、さらに普賢菩薩の毛孔の国土に入り、一つの毛孔の国土の中で一步を進め、不可説不可説仏刹微塵数の世界を越えたのである。これらはすべて誠願の力によって成就することができたものである。

(2) 湛然居士は、日頃のあらゆる行為の中で寂靜の境界に住み、常に以上のような觀想を保っている。わたしは、その志気の平凡でなく精進の勇猛なるのを喜ばしく思っていた。そこで、この軸に教誨を求められたのを機に、以上のことを書いてここに送る。

(1) 湛然居士 (五三) 湛然居士趙都監猷之と同一人であろう。伝記不詳。

(2) 昔、善財童子……『華嚴經』入法界品(大正藏卷一〇—四一九b)による。荒木本一一頁にも出づ。(四五) 注(2) 参照。

(3) 幻住の力……同(四三七c)による。荒木本八〇九頁にも出づ。

(4) 普賢の毛孔刹……同(四四二b)による。荒木本九頁にも出づ。

(四五) 幻住道人⁽¹⁾に示す

(1) 昔、德生童子、有德童女、謂善財曰、我等二人、得幻住三昧。見一切世界、皆幻住、因緣所生故。一切衆生皆幻住、業煩惱所起故。一切世間皆幻住、無明有愛等展轉緣生故。一切法皆幻住、我見等種種幻緣所生故。乃至聲聞辟支佛菩薩皆幻住、願智幻所成故。善財聞是語已、豁然

昔、德生童子、有德童女、善財に謂いて曰く、「我等二人、幻住三昧を得たり。一切の世界を見るに、皆幻住、因緣所生なるが故に。一切衆生、皆幻住、業煩惱所起なるが故に。一切世間、皆幻住、無明有愛等展轉緣生の故に。一切法、皆幻住、我見等種種幻緣所生なるが故に。乃至、聲聞・辟支仏・菩薩、皆幻住、願智幻所成なるが故に⁽²⁾」。善財、是の語を聞き已って豁然として頓に毘盧覺海に入りて、本際を動かさず、一念の中に承事して刹刹塵塵諸善知識に供養して一一の善知識の所において、皆不可説不可説仏刹微塵数の三昧を獲て、三昧の力に乘じ

頓入毗盧覺海、不動本際、於一念中承事、供養刹利塵塵諸善知識、於一一善知識所、皆獲不可說不可說佛刹微塵數三昧、乘三昧力、求法之心頓息。從此罷遊南方。何以故。爲於一念了達世界、了達衆生、了達世間、了達世出間、了達聲聞辟支佛菩薩等、皆幻住故。

（2）佛子智常、知身是妄、知法是幻、於幻妄中、善用其心、堅固不退、修如是行。雖是女人、剛烈勇猛大丈夫漢、有所不如。予以是目之、曰幻住道人。因以此軸求法語、撥筆書此、以示之。

（1）昔、徳生童子と有徳童女とが、善財に言った、「我等二人は幻住三昧を獲得した。一切の世界はすべて幻住と見る、それは因縁により生ずるからである。一切衆生はすべて幻住である、それは業煩惱により起こるからである。一切世間はすべて幻住である、それは無明有愛等よりつぎつぎとそれを因縁として生ずるからである。一切法はすべて幻住である、それは我見等の種種のものより幻のような因縁として生ずるからである。さらに声聞・辟支仏・菩薩はすべて幻住である、それは願智の幻より成立するからである」。善財はこの語を聞き終ると、パッと頓に毘盧覺海に入り、根本の世界から動くことなく、しかも、一念の中にすべてを受け取り無數の諸善知識に供養した。それらの一一の善知識の所において、みな不可說不可說仏刹微塵数の三昧を獲て、その三昧の力によって、求法する心は一瞬のうちに息み、これより南方に遊行することをやめてしまったのである。なぜか。一念の中に世界・衆生・世間・出世間・声聞・辟支仏・菩薩等に了達して、それらがすべて幻住であると悟ったからである。

（2）仏子智常も、身が妄であり、法は幻であることを知り、しかも、幻妄の中にあつてよくその心を用い、堅固にして退却

て、求法の心は頓に息む。これより南方に遊ぶことを罷む。何を以ての故に。一念に世界に了達し、衆生に了達し、世間に了達し、出世間に了達し、声聞・辟支仏・菩薩等に了達して、皆幻住なるが為の故に。

仏子智常は、身は是れ妄なることを知り、法は是れ幻なることを知り、幻妄の中に善く其の心を用いて堅固不退にして、是の如き行を修す。是れ女人なりと雖も、剛烈勇猛の大丈夫の漢も、如かざるところ有り。予、是を以て之れを目標^{ちやう}けて、幻住道人と曰う。此の軸を以て法語を求めるに因つて、筆を撥^はつて此れを書して以て之れに示す。

することはなく、このように行を修めている。彼女は女性の身とはいっても、剛毅にして勇猛な点では大丈夫の漢さえ及ばぬものをもっている。そこで、わたしは幻住道人と名づけたのである。この軸に法語を求められたので、このことを書いてここに示す次第である。

(1) 幻住道人 智常尼。陳承務のお婆。もと黙照禪に参じたという。大慧六〇歳の時の法語。この法語は智常に幻住の道号を与えた理由を述べる。

(2) 昔、徳生童子……『華嚴經』入法界品(大正藏卷一〇—四一九c、四二〇a)による。善財童子は五十五所・五十三人の善知識を訪ねる。「」内は八十華嚴の表記。

- | | | | |
|------------------|---------|--------------------------|---------|
| (一) 文殊師利菩薩 | (大三一三c) | (三〇) 不動優婆夷 | (大三五八a) |
| (二) 功德雲〔徳雲〕比丘 | (大三三四a) | (三一) 隨順一切衆生〔遍行〕外道 | (大三六〇a) |
| (三) 海雲比丘 | (大三三五a) | (三二) 青蓮華香〔鬻香〕長者 | (大三六一b) |
| (四) 善住比丘 | (大三三六b) | (三三) 自在海師〔婆施羅船師〕 | (大三六一b) |
| (五) 良医弥伽 | (大三三七b) | (三四) 無上勝長者 | (大三六二b) |
| (六) 解脫長者 | (大三三八b) | (三五) 師子奮迅〔師子頻申〕比丘尼 | (大三六三a) |
| (七) 海幢比丘 | (大三四〇b) | (三六) 婆須蜜多女 | (大三六五a) |
| (八) 休捨優婆夷 | (大三四三a) | (三七) 安住長者〔韓瑟毗羅居士〕 | (大三六六c) |
| (九) 毘目多羅〔毘目瞿沙〕仙人 | (大三四四a) | (三八) 觀世音〔觀自在〕菩薩 | (大三六六c) |
| (一〇) 方便命〔勝熱〕婆羅門 | (大三四六a) | (三九) 正趣菩薩 | (大三六七b) |
| (一一) 弥多羅尼〔慈行〕童女 | (大三四八a) | (四〇) 大天天〔神〕 | (大三六八a) |
| (一二) 善現〔善見〕比丘 | (大三四九b) | (四一) 安住道場地神〔主地神〕 | (大三六八b) |
| (一三) 釈天主〔自在主〕童子 | (大三五〇b) | (四二) 婆娑婆陀夜天〔婆珊婆演底主夜神〕 | (大三六九a) |
| (一四) 自在〔具足〕優婆夷 | (大三五一b) | (四三) 甚深妙徳離垢光明夜天〔普徳淨光主夜神〕 | (大三七二a) |
| (一五) 甘露頂〔明智〕長者 | (大三五二b) | (四四) 喜目觀衆生夜天〔夜神〕 | (大三七三a) |
| (一六) 法宝周羅〔法宝髻〕長者 | (大三五三c) | (四五) 妙徳救護衆生夜天〔普救衆生妙徳夜神〕 | (大三七八a) |
| (一七) 普眼妙香〔普眼〕長者 | (大三五四b) | (四六) 寂靜音夜天〔寂靜音海主夜神〕 | (大三八四a) |
| (一八) 満足〔無厭足〕王 | (大三五五a) | (四七) 妙徳守護諸城夜天〔守護一切城主夜神〕 | (大三八八a) |
| (一九) 大光王 | (大三五六a) | (四八) 開敷樹華夜天〔開敷一切樹華主夜神〕 | (大三九一a) |

（三九）願勇光明守護衆生夜天〔大願精神力救護一

切衆生夜神〕

（四〇）妙徳円満天〔神〕

（四一）瞿夷〔瞿波〕（女）〔女〕

（四二）摩耶夫人

（四三）天主光童女〔女〕

（四四）遍友童子師

（四五）善知衆芸童子

（四六）賢勝優婆夷

この五五人の善知識のなかで（四四）遍友童子は説法していないのでこれを除き、（二）と（五四）の文殊菩薩は二回でてくるので、五十三人の善知識となるといわれる。鎌田茂雄『華嚴經物語』（大法輪閣、一九九一年）二六一〜二六二頁参照。この中の（五一）（五二）の徳生童子と有徳童女が幻住三昧を説くのである。

（四六）張提刑暘叙に示す。『大慧書』荒木本一〇二頁以下にあり、ここは略す

（四七）空相道人淨円に示す^①

（一）古徳云、心若無事、萬法不生。意絶玄微、纖塵何立。此是第一等拖泥帶水底老婆禪。雖然如是、能有幾人、信得及肯得此語。若得無事於心、玄微意絶、則生死魔、何處著手脚。決欲學此道、當急急如救頭然。日裏夜裏、茶裏飯裏、不得有少間斷、方始拽得回頭。若逐日波波地爲塵勞所困、更不著些精神、與之做頭抵、

（四七）堅固解脱長者

（大三九六 b）

（四八）妙月長者

（大四〇一 c）

（四九）無勝軍長者

（大四〇五 c）

（五〇）尸毘最勝〔最寂靜〕婆羅門

（大四一三 c）

（五一）徳生童子

（大四一七 b）

（五二）有徳童女

（大四一七 c）

（五三）弥勒菩薩

（大四一八 a）

（五四）文殊師利菩薩〔再〕

（大四一八 c）

（五五）普賢菩薩

（大四一八 c）

（大四一九 a）

（大四一九 a）

（大四一九 b）

（大四一九 b）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

（大四一九 c）

古徳云く、「心若し無事ならば、万法生ぜず。意、玄微を絶せば、纖塵何ぞ立せん」^②。此は是れ第一等の拖泥帶水の老婆禪なり。是の如きと雖然も、能く幾人有つてか信得及して此の語を肯い得ん。若し心を無事にし玄微の意を絶するを得ば、則ち生死の魔は、何処にか手脚を著けん^③。決して此の道を学ばんと欲せば、当に急急に頭然を救うが如くなるべし。日裏夜裏、茶裏飯裏、少しも間断有ることを得ずして、方始めて頭を拽得回すべし。若し日を逐うて波波地に塵勞の為に困ぜられて更に些の精神を著て之れと頭抵を做さずして、生死の関を破せんと欲せば、是の処有ること無し。

欲破生死關、無有是處。

(2) 有作思惟、從有心起。無心將甚麼思惟。既無思惟、此心安在。能知此心安在者、不屬有、不屬無。畢竟如何。亦無如何、亦無畢竟。

(3) 學道人緊要處、只貴應緣時省力。應緣時不費力、則道業漸純熟矣。道業純熟時、心意穩貼貼地、自然不怕生死。到恁麼田地、呈似人不得、傳與人不得。取不得、捨不得、不可得、亦不可得。但只如此參。莫管得在何時。

(1) 古德が次のように言っている。「心がもし無事であるならば、あらゆるものは生じない。意識が微かな動きを絶てば、繊細な迷い心とてどこに起きることがあろう」と。これは利他行の爲の極め付けの老婆心切の禪である。だが、どれほどの人がこの言葉を信じ切り肯定しきることができようか。もし心を無事にし微かな意識の動きを絶ち切ることができれば、生死の魔とてどこに寄り着くことができようか。この道を学ぼうときっぱりと望むならば、頭に着いた火を払いのけるように急に急がねばならない。昼も夜も日常茶飯の時も、まったく絶え間なくそのようにして、始めて己が頭を引き戻すことができるのである。もし日毎にあたふたとして煩惱にしばられ、更に奮起してこれと体当りしないならば、生死の関を打ち破ろうと望んでも、無理というものである。

(2) 思惟しようとすることは、有心より起こる、無心ならば何を思惟するのか。思惟することが無ければ、この心はどこに存在しようか。この心がどこに存在するかを、知ることができれば、有にも属しないし、無にも属しない。とどのつまりはどうなのか。そこには「どうなのか」と言うことも、「とどのつまり」と言うことも無いのである。

(3) 道を学ぶ人にとっては、一つ一つの行為において力る省くことが大事である。一つ一つの行為に力を費やすことがなけ

思惟を作すこと有らば有心より起こる。無心な甚麼にを將てか思惟する。既に思惟無くんば、此の心安いやすにか在る。能く此の心の安にか在ることを知らば、有にも属せず、無にも属せず。畢竟如何。亦た如何というも無く、亦た畢竟というも無し。

学道の人の緊要の処は、只だ縁に應ずる時に省力(9)なることを貴ぶ。縁に應ずる時に力を費やさざれば、則ち道業漸く純熟(10)す。道業純熟する時は、心意識は穩やかに貼貼地(11)にして自然に生死を怕れず。恁麼の田地に到つて人に呈似することを得ず、人に伝与することを得ず。取ることを得ず、捨つることを得ず。不可得も亦た不可得なり。但だ只だ此の如く參ぜよ。何時いつに在ると管得すること莫なれ。

れば、道業はだんだんに純熟^{しうじゅく}っていく。道業が純熟っていくと、心意識は穩やかに自然に生死を怕れなくなるのである。このような田地^{とち}に到^{いた}って人に呈示^{しやうし}することもできず、人に伝えることもできず、取^とることでもできず、捨^すつることでもできず、把^はえることができないことも把えきれない。ただひたすらこのように参究^{さんくわう}せよ。いつになるかと氣にしていはならぬ。

- (1) 空相道人淨円 中公本「二六」の法語も空相道人に与えたものである。注(450) 参照。
- (2) 古徳云う…… 出典不明。
- (3) 拖泥帶水 中公本一一一(大八九二c)、一二〇(大八九四b)、一三一頁(大八九六b) および注(119) など参照。
- (4) 老婆禪 老婆心は中公本一二九(大八九五c)、一六七(大九〇二c)、一七三(大九〇三c)、一七八頁(大九〇四c) など参照。
- (5) 信得及 信じ切ること。中公本一二一(大八九四c)、一四一頁(大八九八a) など、大慧がしばしば強調する。
- (6) 手脚を著けん 中公本一〇〇頁(大八九〇c) および注(41) 参照。
- (7) 頭然を救う 荒木本七四頁にも出づ。
- (8) 波波地 中公本七一頁(大八九一c) および注(71) で、吧吧地と同じ「べちやくちや」の意味としたが、「あたふた」の意味に訂正したい。
- (9) 頭抵 荒木本三二頁にも出づ。
- (10) 省力 中公本九八頁(大八九〇b) および注(25) 参照。
- (11) 純熟 中公本九七頁(大八九〇b) および注(21) 参照。
- (12) 貼貼地 中公本一〇七頁(大八九一c) の帖帖地と同じ意味。注(82) 参照。

(四八) 了然居士⁽¹⁾に示す

(1) 既立志、要透脫生死、當以生死兩字、貼在鼻尖兒上、時時自警覺。世間塵勞、不用著意排遣、自調伏矣。從上諸佛諸祖、無法傳授與人。只出來暫時作箇證明主宰而已。今之學者不肯退步向自己脚跟下提撕。多是就師家口頭取辦。將謂可

既に志を立てて生死を透脱せんと要せば、當に生死の兩字を以て鼻尖兒上に貼在⁽²⁾して時時に自ら警覺すべし。世間塵勞は意を著けて排遣することを用いざれども自ら調伏す。從上の諸仏諸祖は、法の人に伝授与すること無し。只だ出来して暫時に箇の証明の主宰と作るのみ。⁽³⁾今の学者は、肯⁽⁴⁾て歩を退き自己の脚跟下に提撕⁽⁵⁾せず。多くは是れ師家の口頭について取弁す。以て口伝心授すべしと將謂えり。殊に知らず、返⁽⁶⁾つて謗法の罪を招くことを。人をして心を寒^{さむ}からしむ。

以口傳心授。殊不知、返招謗法之罪。使人寒心。

(2) 近來佛法淡薄、諸方據繩牀稱宗師者、往往多以奇言妙句、密室注解商量、謂之以心傳心。學者無決定志、只要傳授、自甘作下劣人。殊無大丈夫作略。可不悲哉。

(3) 雪峯三到投子、九上洞山。長慶二十年坐破二十箇蒲團。直自到不疑之地、方肯休歇。只如二古德、還有傳授底道理也無。

(4) 了然居士、決欲破生死關、但日用應緣處、時時自警自覺、自提自掇。日久月深、忽然墜著磕著也。無常迅速、時不待人。安樂一日於般若上、做取一日工夫。

(5) 世間財寶、隨緣據自家所有受用。多則爲財寶所困、少則爲撓。請向不多不少處、討箇轉身。且那箇是不多不少處。喚作不多不少、已是漏逗。更欲說破、便見郎當。不如截斷葛藤。異日再得相見、却來不多不少處、爲妙喜下箇注脚。

近來仏法は淡薄にして、諸方にて繩牀に拠つて宗師と稱する者、往往に多くは奇言妙句を以て密室に注解商量して之れを以心伝心と謂う。学者も決定の志なく、只だ伝授せんことを要して、自ら甘んじて下劣の人と作る。殊に大丈夫の作略無し。悲しまざるべけんや。

雪峯は三たび投子に到り九たび洞山に上る。長慶は二十年に二十箇の蒲団を坐破す。直に自ら不疑の地に到り、方めて肯つて休歇す。只だ二りの古徳の如きは、還た伝授の道理有りや。

了然居士、決して生死の関を破せんと欲せば、但だ日用応縁の処に時時に自ら警し自ら覚し、自ら提し自ら掇せよ。日久月深して忽然として墜著磕著せん。無常迅速にして時は人を待たず。安んぞ一日、般若の上に一日の工夫を做取することを楽しまん。

世間の財宝は縁に随つて自家の有するところに拠つて受用せよ。多いときは則ち財宝の為に困ぜられ、少なきときは則ち撓を爲す。請う多からず少なからざる処に箇の轉身を討ねよ。且く那箇は是れ不多不少的の処。喚んで不多不少と作さば、已に是れ漏逗なり。更に説破せんことを欲せば、便ち見る郎當なることを。如かず葛藤を截断せんには。異日再び相見することを得ば、却来して不多不少的の処を妙喜が為に箇の注脚を下せ。

（１）志を立てて、生死しうじを脱け出たいと望むならば、いつも「生死」の二字を鼻先に貼り着けて、自分を張りつめさせていなければならぬ。そうすれば、世間の煩わしさはことさらにかまわなくとも自然に克服されるであらう。いままでの諸仏諸祖には、人に伝授するような法など無い。ただ出生して仮に証明者となるだけである。ところが、今の修行者は、一步退いて自己の脚下で取り組もうとはせず、何かと師家の口先のことを取り入れて、口伝し心授できるものと思い込んでゐる。それがかえって謗法の罪を招くことだと言うことを全く判っておらぬのだ。そのことを思うとゾッとする。

（２）近頃の仏法は薄っぺらで、諸方で禅床でふんぞりかえって師家と称している連中は、何かという密室の中で奇言妙句を注解しひねくりまわして、これを以心伝心などと言うばかりである。修行者にもきっぱりとした志がなく、ただ伝授されることを望むだけで、自ら甘んじて下等者と作り下がっているのである。大丈夫のはたらきなど全く無い。なんと、悲しいことではないか。

（３）雪峰は三たび投子に参じ九たび洞山を尋ね、長慶は二十年の間に二十箇の坐蒲を坐禅しつづし、かくて自ら不疑の地に到達して、始めてくつろぎきつたのである。たとえばこの二人の古徳のごときは、伝授された道理が有っただらうか。

（４）了然居士よ、きっぱりと生死の関を打ち破らんとするならば、ただ日頃の営為の処でいつも自分を張りつめさせ、自身で取り組むのだ。月日の経つうちに、突如、自在にあやつれるようにならう。無常は迅速にして時は人を待たず、と言う。余裕のある時間には、すべて般若に対して参究するのだ。

（５）世間の財宝はその状況に應じ、自ら持ち分に應じて用いるものである。多ければ財宝にしばらくられ、逆に少なければ行きづまる。どうか多少に関わらないところで転機をつかまれない。では、どこが多少に関わらぬところか。これが「多少に関わらぬ」と呼んでしまえば、もうボロを出すことになるし、更に説き尽くそうと思えば、すぐにぶざまなまがあらわれるのである。となれば、葛藤こつぽんを断ち切る方がましだ。いつか再び相見の機会あらば、今度はそちらの方からこの多少に関わらぬところを注釈してもらいたい。

（１）了然居士『語録』巻一一（大八五七c）および『年譜』四六歳の条により、鄭拳之の名が知られるが、伝記不詳。

（２）生死の両字……中公本一一六～一二七頁（大八九三c）および注（142）参照。

（３）従上の諸仏……中公本一七〇（大九〇三b）、二〇五頁（大九〇九c）に同様の主張がある。

- (4) 提撕 中公本一〇五頁(大八九一b) および注(67) 参照。
- (5) 將謂えり 中公本一〇七頁(大八九二a) および注(86) 参照。
- (6) 宗師と称する…… 同様の主張は、中公本一一二頁(大八九二c) 参照。
- (7) 決定の志 中公本九六頁(大八九〇a) および注(13) など、大慧が強調することである。
- (8) 雪峰は…… 中公本一八七(大九〇六b)、一九四頁(大九〇七c) および注(398) 参照。
- (9) 長慶は…… 慧稜(八五四―九三二)、杭州塩官県の人、俗姓は孫氏。雪峰義存の法嗣。福州長慶院に住す。長興三年五月一七日示寂。世寿七九。この話の出典不明。『正法眼蔵行持』(大久保道舟編『道元禅師全集』巻上―一五二頁、筑摩書房)に「長慶の慧稜和尚は、雪峰下の尊宿なり。雪峰と玄沙とに往来して、参学すること僅二十九年なり。その年月に、補陀二十枚を坐破す」とあり、「補陀二十枚を坐破す」の出典が不明とされるが、この大慧法語は参考になる。
- (10) 自ら提し自ら援せよ 提援は手の上に物をのせて重さを量ること。中公本一五三頁(大九〇〇b) に使用例がある。
- (11) 壓著礧著 築著礧著、撞著礧著に同じ。中公本二三頁(大九一一a) および注(489) 参照。荒木本一五、一二二、一二三六頁にも出づ。
- (12) 無常迅速 生死事大と結びつけて大慧は強調する。中公本一一六頁(大八九三b) および注(141) 参照。法語の中には、七ヶ所(大八九七c、九〇三c、九〇六c、九一〇c、九一一b、九一二a、九一三a) に見える。
- (13) 漏逗 破綻をあらわすこと。荒木本二八頁に漏逗不少の語がある。
- (14) 郎当 (正) と (正) は「郎当」を「即当」に誤る。郎当はだらしないこと。
- (15) 葛藤を截断 中公本一二五(大八九五b)、一三七頁(大八九七b) および注(241) 参照。

(四九) 妙明居士黃子余に示す⁽¹⁾

(1) 妙喜尋常無禪可談、無法可說。只據學者來情、隨宜應變而已。妙明居士黃子餘、以此軸來求指示。且有夢幻界中無一可樂之語。爲請直欲參到徹頭自休自歇處爲究竟。非如他人要會禪資談柄自欺也。若生死岸頭不得力、縱學得玄妙知見無量無邊、於日用應緣處不得力、却成謗

妙喜は尋常、禪の談すべきなく、法の説くべきなし。只だ学者の來情に拠って宜に随い変に應ずるのみ。妙明居士黃子余は此の軸を以て來って指示を求む。且く夢幻界中の一として樂しむべきこと無きの語有り。為に請う直に參じて徹頭して自休し自歇するところに到って究竟と爲んと欲す。他人の禪を會して談柄を資せんことを要して自ら欺く如くなるにあらず。若し生死岸頭に力を得ざれば、縦い學得して玄妙知見無量無邊なるも日用應緣の処に力を得ず、却って謗法の愆を成ぜん。是れ善因なりと雖も、返って惡果を招く。

法之愆。雖是善因、返招惡果。

(2) 妙喜觀其立志不凡、喜爲其葛藤。只知夢幻不實無一可樂底一念、便是當人成佛作祖底根本也。不必他求。

(3) 不見、吾佛世尊有言、知幻即離、不作方便。離幻即覺、亦無漸次。苟得一念相應、如善財聞彈指聲、頓證塵沙諸佛無邊法門。無少無剩。只怕當人無決定志、半信半疑矣。此事許聰明靈利漢擔荷。若用聰明靈利擔荷、則背馳矣。何以故。爲聰明靈利人、多思量多計較、將謂此事可以思量計較得成。只管在裏許、頭出頭沒。殊不知、返被此障、却無人頭處。苟能於日用應緣處、不昧最初一念、不忘懷不著意。只恁麼放教自由自在。平昔所作所爲、或善或惡、已過去者、更不須思量分別。若更思量分別、其障尤大。於聰明靈利、永劫無有悟時。但盡凡情。別無聖解。若將心等悟、則自謂我今見在迷中。若作此解、則是迷中又迷、夢中說夢。欲得徹頭、無有是處。但只在疑不破處參。疑不破、則全在生死裏。忽然向日用應緣

妙喜其の志を立つること凡ならざるを觀るに、喜んで其れが爲に葛藤す。只だ夢幻不實にして一として樂しむべき無きことを知る底の一念は、便ち是れ當人成佛作祖の根本なり。必ずしも他に求めざれ。

見ずや、吾が仏世尊の言えることあり、「幻を知れば即ち離る、方便を作さず。幻を離れば即ち覺る、亦た漸次無し」⁽⁵⁾。苟し一念相應することを得ば、善財の彈指の声を聞いて頓に塵沙の諸仏無辺の法門を証するが如し⁽⁶⁾。少くることなく剩ることなし。只だ怕る、當人の決定の志無くして半信半疑なることを。此の事は聰明靈利の漢の担荷することを許す。若し聰明靈利を用いて担荷するときは、則ち背馳す。何を以ての故に。聰明靈利の人は多く思量し多く計較して、此の事は思量計較し得て成すことの可以ると將謂えるが爲なり。只管だ裏許に在って頭出頭沒す⁽⁸⁾。殊に知らず、返て此の障を被って却て入頭の処無きことを。苟し能く日用應緣の処に最初の一念を昧さざれば、忘懷せず著意せず。只だ恁麼に自由自在なら放教めよ。平昔の所作所爲は、或は善或は惡、已に過ぎ去りし者は、更に思量分別なることを須いず。若し更に思量分別せば、其の障尤も大なり。聰明靈利に永劫にも悟時有ること無し。但だ凡情を尽せ。別に聖解無し。若し心を將て悟を等つときは、則ち自ら謂えり我今見在迷中に在りと。若し此の解を作さば、則ち是れ迷中また迷なり、夢中に夢を説くなり⁽¹⁰⁾。徹頭なることを得欲せば、是の処有ること無し。但だ只だ疑の破せざる処に在って參ぜよ。疑の破せざるは則ち全く生死の裏に在り。忽然として日用應緣の処に不知不覺にして、閑振を撞翻す⁽¹²⁾。恁麼の時に當って自ら他人の処分を取ら著めず。

處、不知不覺、撞籬關捩。當恁麼時、自不著取他人處分矣。

(4) 未能如是、且看箇話頭。僧問趙州、狗子還有佛性也無。州云、無。行住坐臥、却將聰明靈利底、試就箇無字上用看。亦將這思量分別底、就箇無字上用看。覺得聰明靈利思量分別、總使不著、方寸中七上八下肚裏悶時、正是好處。往往學此道者、多只恁麼休去。殊不知、心思路不行、生死兩頭將斷矣。此是妙喜平日得力處。故時時以此布施學者。除此外別無禪道佛法可傳可授。若別有可傳可授者、乃是謗佛法僧、欺賢罔聖。我王庫內、無如是刀。

(5) 子餘、要直截做工夫、但只如此做將去。莫管得在何時。古德雖曰、欲識佛性義、當觀時節因緣。時節若至、其理自彰、此乃古德方便接引之詞。忽然得時、亦無時節。如此說話、還有證據處否。前不云乎。知幻即離、不作方便。離幻即覺、亦無漸次。妙明居士、若信得此說及、則成佛有餘。若信不及、亦在其中。

未だ能く是の如くならずんば、且く箇の話頭を看よ。僧、趙州に問う、「狗子に還た仏性有りや」。州云く、「無」。行住坐臥、却って聰明靈利底を將て試みに箇の無字上に就いて用いて看よ。亦た、この思量分別底を將て箇の無字上に就いて用いて看よ。聰明靈利思量分別、総に使い著せずして、方寸の中に七上八下し、肚裏に悶^{もだ}える時に正に是れ好処なることを覚ゆ。往往この道を學ぶ者は、多くは只だ恁麼に休し去る。殊に知らず、心思の路行かず、生死の兩頭は將に断^きぜんとすることを。此は是れ妙喜平日の力を得る処なり。故に時時に此を以て學者に布施す。此を除いて外に別に禪道仏法の伝うべき授くべき無し。若し別に伝うべき授くべき者有らば、乃ち是れ仏法僧を謗じ、賢を欺^{なま}し聖を罔^なす。我が王庫の内にはの如き刀無し。

子余、直截に工夫を做さんと要せば、但だ只だ此の如く做し將ち去れ。何時に在るかを管得すること莫れ。古德の、「仏性の義を識らんと欲せば、当に時節因縁を觀ずべし。時節若し至れば、其の理自ら彰る」と曰うと雖も、此れ乃ち古德の方便接引の詞なり。忽然として得る時も亦た時節無し。此の如き說話は還た証^は拠の処有りや。前に云わずや。「幻を知れば即ち離る、方便を作さず。幻を離れば即ち覺る、亦た漸次無し」と。妙明居士、若し此の説を信得及せば、則ち成仏に余りあり。若し信不及なるも亦た其の中に在り。

(1) 妙喜^{わた}には日頃、語るにたる禪もなく、説き明かすにたる法もない。学ぶ者の求めによって適宜対応するだけである。妙明居士黃子余はこの軸をもって来て指示を求めた。そこで、「夢幻の世界の中には一つとして楽しむべきことは無い」と言う言葉が有るので、ただちに徹底して自ら休憩する境地を参究するのを究極の目的としてほしいと思う。それは他人が禪を会して話題に供しようとして自ら欺くようなものであってはならないのだ。もしも生死の崖淵でさとの力を得ないならば、たとい無量無辺の奥深く優れた知見を学び得たとしても、日頃の営為の中で力を得ることはできない。それどころか、逆に謗法の罪を作ることになる。善因ではあっても、反対に惡果を招くのである。

(2) わたしはあなたの志の非凡なるを觀て、喜んでここに文字を連ねるのである。「この世は夢幻であつて眞実ではなく一つとして楽しむべきことは無い」と言うことを知る一念こそは、その人の仏祖と成る根本なのである。他に求めるには及ばない。

(3) 吾が仏世尊が次のように言っていることを知っているだろう。「幻と知ればそのままそれを離れ、そこでは方便を作すことは無い。幻を離るればそのまま覺りであり、そこには次第にと言うことは無い」。もし先の一念がこの經文と相応することができれば、ちやうど善財が指を弾いた音を聞いてすぐに無數の諸仏の無辺の法門を証するようなものであつて、欠けることもなく剩ることもはない。その人にきつぱりとした志が無くて半信半疑であることを心配するだけである。この事を聰明伶俐の人が担えることは認めるが、もし聰明伶俐によつて担うとすれば、背くことになる。なぜか。聰明伶俐の人は思量し分別し過ぎてこの事は思量し分別して達成することができると思い込むからである。ただここで浮き沈みするばかりで、逆にそれが障害となつて、もはや悟りの手がかりが無くなることを全く判つてはいない、もし日頃の営為のところで最初の一念を見失うことがなければ、忘懷（無意識）ともならず、著意（興奮）ともならない。専らこのように自由自在の状態になるようにせよ。平素の行為は善であつても惡であつても、已に過ぎ去つたものは、それ以上思量分別する必要はない。もし更に思量分別するならば、その障害は最も大となるのである。聰明伶俐の状態では未來永遠にも悟る時は無いのである。ただまよひの意識を尽すことだ。それ以外の悟りの見解は無い。もし心をめぐらして悟りを期待するときは、自分は今現に迷の中に在るのだ、と自ら思うものである。もしもこの考えをもてば、迷の中のさらなる迷なのであり、夢の中で夢を説いているようなものである。徹底した悟りを得たいと望んだところで、無理というものである。それ故にただ疑つて打ち破れないところを参究せよ。疑つ

て打ち破れなければ、全く生死の中に在るのである。日頃の當為のところで知らないうちに、突然に要をくると回転させる。この時になれば、もはや他人のたすけを借りることはないであろう。

(4) まだそのようになることができないとするならば、とにかく次の話題を取り上げよ。僧が趙州に問うた、「狗子に仏性があるか」。趙州、「無」。行住坐臥の日頃の生活の中で聡明伶俐さでもってこの「無」の字の上で参究してみよ。また、この思量分別でもってこの「無」の字の上で参究してみよ。そうしたならば聡明伶俐も思量分別も全く役に立たず、心の中がぐるぐる回り、もんもんとしている時こそちょうどよいところと判るであろう。しかし、しばしばこの道を学ぶ者は、ただこのような段階で止めてしまう。心意識の路が塞がれ、生と死の両辺は断ち切らねばならないことが、全く判ってはいないのである。これこそわたくしが平素の悟りの力を得るところである。それ故にいつもこのことを道を学ぶ者に施すのである。この外に別に伝えたり授けたりする禪の道や仏の教えはないのである。もし別に伝えたり授けたりするものが有るならば、それは仏法僧を誹謗し、賢人を欺き聖人をないがしろにすることになる。だから「我が王の庫にはかかる刀なし」というわけである。

(5) あなたが、ズバリと工夫をしたいと望むならば、ただこのようにせよ。何時悟れるかにかかずらつてはならぬ。古徳は「仏性の意味を識りたいと望むならば、時節因縁を觀しなければならぬ。時節がもし至るならば、その真理は自然と顯現する」と言われているが、これは古徳が方便で導く言葉にすぎない。パッと悟りを得る時は、時節は無いのだ。このような説には、さて、他の証明が有るか。それは前に言ったであろう。「幻と知ればそのままそれを離れ、そこでは方便を作すことはない。幻を離るればそのまま覺りであり、そこには次第にと言うことは無い」と。妙明居士よ、もしこの説を信じきれば、成仏するのに十分である。たとい信じれないとしても、それはその説の中に在るのだ。

(1) 妙明居士黃子余 黃掾のこと。知果、通判となる。『索引』卷四一一八五四頁参照。『年譜』六〇歳の条によれば、この年に大慧が与えた法語という。荒木本一八四〜一八五頁に大慧が与えた書が存す。また中公本二〇〇〜二〇一頁の「空相道人黃通判の宅に示す」法語は、この人の妻に当る。注(450) 参照。

(2) 夢幻界中…… 出典不明

(3) 生死岸頭 中公本一一三(大八九三a)、一三四(大八九六c)、一五八頁(大九〇一a) など参照。

(4) はれ善因なり…… 荒木本二二八頁にも出づ。

訳注『大慧普覺禪師法語(続)』(上) (石 井)

- (5) 吾が仏世尊……『円覚経』（大正藏卷一七一九一四a）による。
- (6) 善財の彈指（四四）の注（2）に既出。
- (7) 聰明靈利……中公本九九頁（大八九〇b）の外、大八九二b、八九九c、九〇四b、九〇六b、九〇七c、九〇八b、九一二aなどに取り上げられる。
- (8) 頭出頭没 中公本一二二（大八九四c）、一七三（大九〇三c）、二二一頁（大九一一a）参照。
- (9) 入頭の処 中公本一一三頁（大八九三a）および注（129）参照。
- (10) 迷中また迷 中公本一一四頁（大八九三a）参照。
- (11) 夢中に夢を説く 中公本一二七頁（大八九七a）参照。
- (12) 閑振を撞翻す 中公本一六六頁（大九〇二b）および注（324）参照。荒木本一三九頁も参照。
- (13) 七上八下 中公本一〇四頁（大八九一b）および注（64）参照。
- (14) 我が王庫の……『伝心法要』（入矢義高訳注本六二頁、筑摩書房、一九六九年）による。原話は『涅槃經』如来性品（大正藏卷二二六五三c）にある。
- (15) 古徳の、仏性の義を……百丈懷海の語。『宗門統要集』卷四瀉山靈祐章（東洋文庫所藏宋版二五丁左）による。荒木本一五〇頁にも出。

(五〇) 覚明居士夏運使⁽¹⁾に示す

(1) 道須神悟。難以言傳。縱有可傳、皆文字語言耳。直饒於文字語言中採集得、更玄更妙、亦不出心意識邊事。今時學道之士、不肯虛却心。一向安排要知、轟一聲霹靂相似。等待悟去、方始心休。此等名爲可憐憫者。自謂我今正迷、未能得悟。大似在飯糲裏坐、揚聲大叫問人覓飯喫、在大江信道渴殺人。眞是迷中又迷、妄想中又妄想。千佛出世、亦救不得。

道は須らく神悟すべし。言を以て伝うること難し。縦い伝うべき有るも、皆文字語言なるのみ。直饒い文字語言の中に採集し得て更に玄更に妙なるも、亦た心意識辺の事を出でず。今時の学道の士は肯って心を虚却せず。一向に安排して知らんことを要し、一声の霹靂を轟かすに相似て、悟を待ち去って方始めて心休す。此等を名づけて憐憫すべき者と為す。自ら謂えらく、我今正に迷って未だ悟りを得ること能わず、と。大いに飯糲裏に在って坐して声を揚げて大いに叫んで人に問って飯を覓めて喫し、大江の心に在って人を渴殺すと道うに似たり。眞にこれ迷中また迷、妄想中のまた妄想なり。千仏出世するも亦た救い得ず。

(2) 殊不信、此事一切見成。開眼便覩見、開口便道著、安排釘釘不得。滿眼滿耳、無你回避處。說空則眼見耳聞無不空。說實則眼見耳聞無不實。何以故。眼若不空、將甚麼見物。耳若不空、將甚麼聽聲。鼻若不空、將甚麼辨香臭。舌若不空、將甚麼別甘苦。身若不空、將甚麼知痛痒。意若不空、將甚麼分別。然分別亦空、痛痒亦空、甘苦亦空、香臭亦空、聲亦空、物亦空、空亦空、此語亦不受。故曰、一切見成、無回避處。得到這箇田地了、方知眼見底是實、耳聞底是實、鼻嗅底是實、舌嘗底是實、覺觸底是實、分別底是實。得如此了、始可說無眼耳鼻舌身意、無色聲香味觸法等。何以故。不見、淨名老子云、法不可見聞覺知。若行見聞覺知、是則見聞覺知、非求法也。須是當人不起纖毫修學心、只在自己脚跟下、坐斷報化佛頭、生死魔王、無摸索處、諸天捧花無路、外道潛覩不見蹤跡。當恁麼時、說空說實、只由自家、不被別人差排處分矣。

(3) 不見、古佛有言、心同虛空界、是

殊に信ぜず、此の事は一切見成せしことを。眼を開けば便ち覩見し、口を開けば便ち道著し、安排釘釘し得ず。滿眼滿耳、⁽⁵⁾ 你が回避する処無し。空と説くときは則ち眼見耳聞は空ならざること無し。實と説くときは則ち眼見耳聞は実ならざること無し。何を以ての故に。眼若し空ならざれば、甚麼を將てか物を見る。耳若し空ならざれば、甚麼を將てか声を聴く。鼻若し空ならざれば、甚麼を將てか香臭を弁ぜん。舌若し空ならざれば、甚麼を將てか甘苦を別たん。身若し空ならざれば、甚麼を將てか痛痒を知らん。意若し空ならざれば、甚麼を將てか分別せん。然るに分別も亦た空、痛痒も亦た空、甘苦も亦た空、香臭も亦た空、声も亦た空、物も亦た空、空も亦た空、この語も亦た受けず。故に「一切見成して回避するところ無し」と曰う。這箇の田地に到ることを得了らば、方めて知る、眼に見る底も是れ実、耳に聞く底も是れ実、鼻に嗅ぐ底も是れ実、舌に嘗める底も是れ実、覺觸する底も是れ実、分別する底も是れ実なることを。此の如くなることを得了つて始めて眼耳鼻舌息意無く、色声香味觸法無き等と説くべし。何を以ての故に。見ずや。淨名老子の云く、「法は見聞覺知すべからず。若し見聞覺知を行ずれば、是れ則ち見聞覺知にして法を求むるにあらず」。⁽⁸⁾ 須らく是れ当人の纖毫も修学の心を起こさずして、只だ自己の脚跟下に在りて、報化仏頭を坐斷せば、⁽⁹⁾ 生死の魔王も摸索する処無く、諸天の花を捧ずるに路無く、外道潛かに蹤跡を覩不見なるべし。⁽¹⁰⁾ 恁麼の時に當つて空と説き実と説くも、只だ自家に由つて別人の差排の処分を被らず。

見ずや。古仏の言えること有り、「心は虛空界に同じ。是れ虛空に等しき法な

等虚空法。證得虚空時、無是非非法。所以從上先德到這裏、無插觜處。從頭棒將去、從頭喝將去。有靈骨底、撩起便行。蓋聲蓋色、奇特玄妙、垢染惹絆他不得。世間塵勞、拘牽他不得。染淨二邊、無捉摸處。凡所發言、無不出格。非是強爲、法如是故。

（4）覺明居士、決欲究竟此事、但只如此直截理會。不可存心在悟邊。存心在悟邊、則使人發狂。轉疎轉遠矣。亦不得忘懷空寂。忘懷空寂、則心困矣。心困、則昏沈矣。轉疎轉遠、則掉舉矣。昏沈掉舉二種病不除、欲息念馳求心、大似鄭州出曹門。且喜沒交涉。到這裏、無你用心處。妙喜只說得到這裏。若是噴地一下、却在覺明居士。咄。且置是事。

（1）道は心で悟らねばならない。言葉で伝えることは難しい。伝えうるものがたとひ有ったとしても、それはみな文字や言葉に過ぎないし、たとい文字や言葉の中からより奥深くより優れたものをひろい集めたとしても、それは所詮、心意識という範圍を出るものではない。今頃の道を学ぶ者は心をカラッポにしようとは思しないで、ひたすら小細工で知ろうとし、あたかも一声の雷が轟くように、悟りを得て始めて心がおさまるのだと考えている。こういうのを哀れな奴と言うのだ。やつらは、自分は今正に迷っていてまだ悟りを得ることができてはいないと思ひ込んでいる。それは全く、飯びつの中に坐っているながら飯をくれと大声で叫び、大河のまん中にいながら死ぬほど喉が渇くと言っているのと同じである。真にこれ迷いの中でさらに迷

り。虚空を証得する時、是も無く非法も無し⁽¹²⁾。所以に從上の先德は這裏に到つて觜⁽¹³⁾を挿む処無し。從頭より棒じ將ち去り、從頭より喝し將ち去る。靈骨有る底は、撩起して便ち行く。声を蓋い色を蓋い、奇特玄妙、垢染の他を惹絆するを得ず。世間の塵勞の他を拘牽するを得ず。染淨の二邊の捉摸する処無し。凡そ言を發するところ出格ならざること無し。是れ強いて為すにあらず。法は是の如きが故に。⁽¹⁷⁾

覺明居士。決して此の事を究竟せんと欲せば、但だ只だ此の如く直截に理會せよ。心を存して悟邊に在るべからず。心を存して悟邊に在らば、則ち人をして發狂せしむ。轉た疎なれば轉た遠し。亦た忘懷空寂なることを得ざれ。忘懷空寂なれば、則ち心困ず。心困ずるときは、則ち昏沈す。轉た疎にして轉た遠ければ、則ち掉舉す。昏沈掉舉の二種の病除かずして、念念馳求の心を息めんと欲せば、大いに鄭州の曹門より出づるに似たり。且喜すらくは沒交涉なり。這裏に到りて你的用心する処無し。妙喜は只だ説き得て這裏に到る。若是し噴地一下せば、却在覺明居士に在り。咄。且く是の事を置く。⁽²⁰⁾

うものであり、妄想の中でさらに妄想するものである。たとい千仏がこの世に出現してもこれを救うことはできないのである。

(2) やつらは、この事が一切ありのままに成就していることを全く信じない。だが、それは眼を開けば眼に入り、口を開けばそれを言っていることになり、ならべたり重ねたりすることはできず、眼いっぱい耳いっぱい、それを避けられるところはないのである。空と説くときは眼で見たり耳で聞くことは空でないものは無い。実と説くときは眼で見たり耳で聞くことは実でないものは無い。なぜか。眼がもし空でなかったならば、何をもって物を見るか。耳がもし空でなかったならば、何をもって声を聴くか。鼻がもし空でなかったならば、何をもってよい香りと臭いにおいを嗅ぎわけようか。舌がもし空でなかったならば、何をもって甘いと苦いとを区別できようか。身体がもし空でなかったならば、何をもって痛いと痒いとを知りえようか。意識がもし空でなかったならば、何をもって対象を分別しようか。しかも、分別も空、痛痒も空、甘苦も空、香臭も空、声も空、物も空、空も空であり、この語自体もまた手にふれるものではない。だから一切ありのままに成就していて避けるところは無いと言うのである。この田地とこに到り得て始めて、眼で見るものも実、耳で聞くものも実、鼻で嗅ぐものも実、舌で嘗めるものも実、身体に触れるものも実、分別するものも実である、と判るのである。このようになることができて始めて、「眼耳鼻舌身意は無く、色声香味触法は無い」等と説くことができるのである。なぜか。浄名居士が次のように言っているのを知っているだろう。「真理は見聞覚知することはできない。もし見聞覚知を働かすならば、それは見聞覚知であって真理を求めたのではない」。それではその人自身が道を修学する心をわずかばかりも起こさず、自己の脚下において、報身仏・化身仏の頭を断ち切れば、生死の魔王が探し求める手がかりは無く、諸天が花を供養する方法は無く、外道が伺い見ても足跡が見あたらないのである。この時には空と説くのも実と説くのも、ただ自らによって、他人のさしずを受けることはないのである。

(3) 古仏が次のように言っているのを知っているだろう。「心は虚空世界と同じであり、虚空と等しい真理である。虚空を悟ることができた時、是も無く非も無い」。だから歴代の先徳も、この境界に到達すれば、もはや口をさしはさみようと無く、はなから棒で打ったり、喝！と怒鳴ったりするほかないのである。すぐれた機根をそなえた者は、それをつついてすぐに立ちさるのである。いかなる声色も、奥深い言葉も、世間の汚れもかれを引き回すことはできないし、煩惱もかれを拘束するこ

とはできないし、さらに染淨のどちらもかれを捉えようは無いのである。言葉を出せばいずれも出格でないものは無い。これは無理に為すのでなく、法とはこのようなものだからである。

(4) 覚明居士よ。きっぱりとこの事を究めたいと望むならば、ただこのようにズバリと体得せよ。心を悟の上にとどめてはならない。心を悟りの上にとどめることは、人を発狂させてしまう。そのようにすればするほど、ますます疎遠となる。かといって無意識で空虚の状態になつてはならぬ。無意識で空虚の状態となれば、心はねむけに陥る。心がねむけに陥れば、昏沈（心の沈み込み）となる。それがますます疎遠となれば、今度は逆に掉挙（心の跳ね上がり）となる。昏沈と掉挙の二種の病を除かないで、外のものを追い求める一念一念の心を息めさせようと思つても、西の鄭州へ行くのに東の曹門を出るようなもので、見事に全くの見当ちがいである。ここに到達すれば、君の怒力することは無い。妙喜が説くことができるのはここまでだ。クシャンと一発するのは、むしろ覚明居士次第である。咄！。まあ、これくらいにしておくことにしよう。

(1) 覚明居士夏運使 伝記不詳。荒木本二二五頁に、五五歳の大慧がこの人に与えた書が存在する。当時、福建省の延平に住んでいた。また、『年譜』六四歳の条にこの人の画像讃がある。

(2) 一向に安排 一向は中公本九七頁（大八九〇a）および注（18）参照。また安排の原意は割りふるの意。中公本一一〇（大八九二b）、一六三頁（大九〇二b）など参照。

(3) 大いに飯糲裏…… 荒木本二三四頁に同じたとえあり。

(4) 釘飯 原意は食べものをたべきれないほどならべること。転じて文章を作るのにいたずらに古語・古字を踏まえて用いること。

(5) 滿眼滿耳 中公本一四三頁（大八九八b）参照。

(6) 眼もし空ならずんば…… 中公本一一八頁（大八九三c）および法語「九」参照。

(7) 眼耳鼻舌身意無く…… 前注および注（149）参照。

(8) 浄名老子……『維摩經』不思議品（大正藏卷一四一五四六a）による。中公本三二二頁（大九一四b）にも出づ。注（563）の五六四aの六は四の誤り。

(9) 報化仏頭を坐断 中公本二〇二（大九〇九a）、二〇三頁（大九〇九b）および注（458）参照。坐断については、中公本一〇九頁（大八九二b）および注（107）参照。

(10) 覩不見 覩見を否定して、覩見できないの意。覩見はうかがい見ること。中公本一六五頁（大九〇二b）参照。荒木本四四、一四六、二二九頁にも出づ。

- (11) 差排 原意はほどよくあしらうの意。中公本一九一頁（大九〇七a）参照。
 (12) 古仏の言える…… 第七祖婆須蜜の伝法偈。『景德伝燈録』卷一（禪文化研究所本九頁）による。
 (13) 箸を挿む 挿嘴とも書く。差し出口すること。
 (14) 靈骨 中公本一二七頁（大八九五b）および注（190）参照。
 (15) 撩起 撩起はつき起こすの意。『明覚禪師語録』卷一（大正藏卷四七―六七五a）にも出づ。
 (16) 惹絆 用例がみあたらず、正確な意味は不明。
 (17) はれ強いて為す…… 中公本一〇八頁（大八九二a）および注（91）参照。大慧の多用する語。
 (18) 鄭州の曹門より…… 鄭州は北宋の都東京（開封）より西に位置す。曹門は東にあるので逆の方向へ向かうことを意味する。全くの見当ちがいをあらわす。『大慧語録』卷三（大八三三b）、卷二二（大八六〇a）、卷二五（大八七六b）にも出づ。
 (19) 且喜すらくは没交渉なり お見事に関係ないの意。
 (20) 噴地一下 中公本一四三頁（大八九八b）および注（257）参照。

(五一) 陳鼎丞元霧に示す^{げんぼう(1)}

(1) 佛祖要妙、盡生死、窮變化、空有爲、實虛豁、絕物理、滅知見、息妄想。淨名所謂、雖修學空、而不以空爲證。修學無相無作、不以無相無作爲證。欲入此門、當如此學。

(2) 今之學道參禪人、多是求知見、覓解會、急要口頭有可得說。故昧却腳跟下消息。縱肯自知非、亦不能痛掃除。此亦無他。蓋不以生死二字、貼在額頭上、退步向著實處做工夫也。且如何名著實處。著實處、却如何做工夫。

仏祖の要妙は生死を尽し變化を窮め、有爲を空じ虚豁を實とし、物理を絶し知見を滅し妄想を息むことなり。淨名の謂わゆる、「空を修學すと雖も、空を以て証と為さず。無相無作を修學すとも、無相無作を以て証と為さず」と、⁽²⁾此の門に入らんと欲せば、当に此の如く學すべし。

今の學道參禪の人は、多是くの知見を求め、解會を^{もと}覓め急に口頭の説くこと得べき有らんことを要す。故に脚跟下の消息を昧却す。縦い肯つて自ら非を知るも亦た痛く掃除すること能わず。此も亦た他無し。蓋し生死の二字を以て額頭上に貼在して、歩を退き著實の処に工夫を做さざるなり。且く如何が著實の処と名づけるや。著實の処は却て如何が工夫を做すや。

(3) 近日叢林、有一種宗師。指示學者著實處、只教人事事莫管、緊閉却眼、死乞怛地坐、一切莫思量。坐來坐去、坐得神識昏憒、却似箇魂不散底死人相似。喚作大休大歇、又喚作默而常照。這般物類、自眼不開、却要盲一切人眼、要與伊相似。不信有悟門、以眞實悟入者、爲誑惑人、以悟爲建立。除夙有願力決定信得此事、能滅煩惱、本非大徹大悟。不能到究竟安樂放身捨命處、則定被這般惑亂邪魔。雖是善因、而招惡果。

(4) 前所云、退步向著實處做工夫、但十二時中、行住坐臥、不思善不思惡、不著佛求、不著法求、外不放入、內不放出、常教心地虛豁豁地、如初生孩子、雖具眼耳鼻舌身意、而六用不行。當甚麼時、喚作有亦不可得、喚作無亦不可得、不屬善、不屬惡、不是佛法、不是世間法、無亂可定、無寂可守。只如此崖將去、忽然向無可崖處打失布袋。當此之時、自不著問人如之若何矣。所謂著實處、正如是而已。到得這箇田地、方知釋迦老子云、

近日叢林に一種の宗師有り。學者に著實の處を指示して、只だ人をして事事管することなからしめ、緊く眼を閉却して死乞怛地に坐して一切思量をなからしむ。坐來坐去し神識を坐し得て昏憒にして、却て箇の魂不散底の死人の似くに相似たり。喚んで大休大歇と作し、又た喚んで黙にして常に照らすと作す。這般の物類、自らの眼開かず、却て一切の人の眼を盲せんと要し、伊と相似たることを要す。悟門有ることを信ぜずして、眞實悟入の者を以て人を誑惑すと爲し、悟を以て建立と爲す。夙に願力有つて決定して此の事を信得して能く煩惱を滅するを除きては、本より大徹大悟するにあらず。究竟安樂の放身捨命の處に到ること能わすんば、即ち定んで這般の邪魔に惑亂せられん。是れ善因と雖も、惡果を招く。

前に、歩を退いて著實のところに工夫を做すと云うところは、但だ十二時中、行住坐臥、善をも思わす惡をも思わす、仏に著ても求めず、法に著いても求めず、外より放入せず、内より放出せず、常に心地をして虚豁豁地ならしめ、初生の孩子の眼耳鼻舌身意を具すと雖も、而も六用行ぜざるが如し。甚麼の時に當つて喚んで有と作すも亦た得べからず、喚んで無と作すも亦た得べからず、善にも属せず、惡にも属せず、是れ仏法にもならず、是れ世間法にもならず、乱として定まるべからず、寂として守るべからず。只だ此の如く崖し將ち去つて忽然として崖すべきなき處に布袋を打失す。此の時に當つて、自ら人に之れを如何せんと問ふことを著いざらん。謂わゆる著實の處、正に是の如きのみ。這箇の田地に到得して方めて知らん、釈迦老子の云う、「得念失念は解脱にあらず」ということ無し。成法破法は皆涅槃と名づけ、智慧愚痴は通じて般若と爲す」とは、是れ眞語

得念失念、無非解脫。成法破法、皆名涅槃、智慧愚癡、通爲般若。是真語實語、不欺人語。

(5) 元霧天資近道。信得及作得主、不內邪說。決定須要大法明、方爲究竟。以此軸、求徑捷指示。見其志誠故、撥筆一揮以塞來命。但日用應緣處、時時提撕舉覺。覺得應緣處省力、便是做工夫得力處也。記取記取。自家得力處、拈出呈似人不得、說與人不得。永嘉云、唯證乃知難可測。如此與之酬酢、久久自成一片矣。不著差排、法本如是。如是之法、亘古亘今、先天地生不爲精、後天地死不爲老、終日變化而不爲動、畢盡寂滅而不爲休。言多去道轉遠。且置是事。異日依此忽然打破漆桶、這般說話、盡是閑言長語、都無實事。元霧思之。

(1) 仏祖の教えの要は、生死を尽くし変化を見極め、有爲を空とし空虚を真実とし、事物の道理を超越し知見を滅し、妄想を息めることにある。『浄名経』に「空を修学するといつても、空をもつて証りとほしないし、無相無作を修学するといつても、無相無作をもつて証りとほしない」と言うことである。この門に入りたいと望むならば、このように学ばねばならない。

(2) 今の参禅学道の人には、多くの知見や理解を求めて、口先で説くことができるようにならうとあせる。そのために己の脚下のたよりを見失ってしまう。たとい自ら非を知ったとしても、またそれをとことん掃い除くことはできない。これもまた他

実語にして人を欺かざるの語なり。

元霧は天資、道に近し、信得及し作得主して邪説を内にせず。⁽¹³⁾ 決定して須らく大法明を要して、方めて究竟と爲す。この軸を以て徑捷の指示を求む。その志誠なるを見るが故に筆を撥つて一揮して以て來命を塞ぐ。但だ日用應縁の処に時時提撕举覺せよ。應縁の処に省力なるを覚得せば、便ち是れ工夫を做工夫の処なり。記取せよ、記取せよ。自家得力の処、拈出して人に呈似することを得ず、人に説与するを得ず。永嘉の云く、「唯だ証すれば乃ち知る、測るべきこと難し」⁽¹⁴⁾。此の如く之れと酬酢せば、久久にして自ら一片を成ず。差排することを著せず、法本是の如し。是の如きの法は、古に亘り今に亘り、天地に先んじて生まれるとも精と爲らず、天地に後れて死すとも老と爲さず、終日變化するとも動と爲さず、畢尽寂滅すとも休と爲さず。⁽¹⁵⁾ 言多きは道を去ること転た遠し。且く是の事を置く。異日此に依つて忽然として漆桶を打破せば、⁽¹⁶⁾ 這般の說話、尽く是れ閑言長語にして都て実事無し。元霧、之れを思え。⁽¹⁷⁾

でもない、「生死」の二字を額の上に貼り着けて、一步を退いて実地を踏んで工夫をしないからであらう。それでは、実地を踏むとはどのようなところを言うのか。実地を踏んだところで、どのように工夫をするのか。

(3) 近頃、叢林にある宗師家がいる。学ぶ者に実地を踏むところを指示して、専ら個々の事柄に関わらせないようにさせ、緊く眼を閉じてひつそりと坐禅させて一切の思量をなくさせている。坐しつづけて心識がもうろうとしてあたかも魂が抜けきれていない死人のようである。それを「徹底した休歇」と言い、また「黙にして常に照らす」と言うのである。こいつらは自らの眼が開いていない上に、逆に一切の人の眼を盲にして、自分とかれとそっくりにさせようとする始末である。彼らは悟りの門が有ることを信じないで、真実の悟入の者は人々をたぶらかし、悟は仮設されたものとインチキ呼ばわりする。もともと願力をもつてきつぱりとこの事を信じきって、煩惱を滅することができるとでないかぎり、徹底してもとより大悟ではない。究極の安樂の身命を投げ出した境界に到達できなければ、きつとこれらの邪魔にかき乱されることになる。これは善因と言っても悪果を招くことになる。

(4) 前に「一步を退いて実地を踏んで工夫をする」と言ったのは、ただ十二時中、行住坐臥、善をも思わず悪をも思わず、仏にも求めず法にも求めず、外から放し入れず、内から放出せず、常に心地を空っぽにして、生まれた赤ちゃんが眼耳鼻舌身意の器官を備えていても、六つの働きが動かないようなものである。このような時に有と呼ぶこともできないし、無と呼ぶこともできないのである。また、善にも属することはなく、悪にも属することもなく、これは仏法にもならず、これは世間法にもならないのである。定まるべき乱もなく、守るべき寂もない。ただひたすらかくのごとくつきつめて行くとパツと究めるべきところのないところで後生大事な荷物を捨て去ることができるのである。この時になって、もはや人に「どうしたらいいだろう」と問う必要はないのである。先に言った実地とは正にこのようなのである。この田地とちに到ることができて、釈迦老子が次のように言うことが始めてうそいつわりのない真実の語であることが判るのである。言く、「念を得るのも念を失うのも解脱そのものである。法を打ち立てるも法を破るもみな涅槃と名づけ、智慧も愚痴も共に般若とするのである」と。

(5) 元霧は、天性は道に近い。信じきり主となることができて邪説を取り込むことはない。きつぱりと大法明を求めて始めて究竟と思うのである。この軸をもつてわたしに肝要の指示を求めている。その志の誠なるを知っているので筆を取って一氣に書いて希望に添ってあげたのである。ただ日頃の営為のところでもいつも取り組み目覚めよ。対応のところでも力を省くことを

自覚することができれば、そのまま工夫して力を得るところなのである。よくよく覚えておきなさい。自ら力を得るところは、取り出して人に呈示することができないし、人に説くことができないのである。永嘉が、「実際に自分で証ってはじめてわかるのであって、臆測することは難しい」と言っているようなものである。このようにこれと応対すれば、しばらくして自然に一枚と成るのである。そこに加減することを必要としないし、法とは本来そのようなものだからである。このような法は、古より今に至るまで、天地に先んじて生まれたとしても（天地を生みなす）精氣と為ることはなく、天地に後れて死んだとしても老いると言うこともない、一日中変化したとしても動くと言うこともなく、究極的に滅したとしても休むと言うこともないのである。言葉が多いのは道からますます遠ざかっていくのである。まあ、ここまでしよう。将来これによってパッと漆桶を打ち破ることがあれば、この説示は、総て無駄な言葉となつて全く実りは無いことになる。元霽よ、このことを思念せよ。

(1) 陳鼎丞元霽 伝記不詳。

(2) 浄名の謂わゆる……『維摩經』菩薩行品（大正藏卷一四—五五四c）による。

(3) 死怙怙地 生氣を失つて死んだようなさまをいう。死獍狙地とも書き、荒木本一九頁に出づ。共に大慧が黙照邪禪者を批難した言葉で、以下、大慧の差別的表現が多出する。

(4) 惛憒 心のくらしいさまをいう。

(5) 魂不散底の死人 元來、『玄沙広録 中』（入矢義高監修本—一二三頁）の玄沙師備の語。中公本一七〇頁（大九〇三b）および注（339）参照。

(6) 大休大歇 中公本一六四（大九〇二a）、一九五頁（大九〇八a）のように、元來は徹底した大悟のところ、大いなる解脱の境界の意味であるが、ここでは黙照邪禪者が未到達を勘違いして言っていること。

(7) 黙にして常に照らす 黙照禪の命名の出典で、宏智正覺撰「黙照銘」による。中公本一〇八頁（大八九二a）および注（96）参照。悟門有ること……同様の主張は中公本一六一（大九〇一c）、二二一頁（大九一〇c）および荒木本二〇六、二二八頁にもある。

(9) 虚豁豁地 中公本一六一（大九〇一c）、二二四（大九一一b）、二二六頁（大九一一c）など参照。

(10) 崖し將ち去つて 崖は握や掬と同じく追いつめること。荒木本七、六五、七六、七八、一一六頁にも出づ。

(11) 布袋を打失す 中公本一六九頁（大九〇三a）および注（337）参照。

(12) 釈迦老子の云う……出典不明。『大慧語録』卷五（大八二九c）にも出づ。

- (13) 信得及し作得主して 中公本一四一頁(大八九八a) など大慧の強調する語。
- (14) 永嘉云く……『証道歌』(筑摩本四〇頁)による。『語録』卷一七普說(大八八四a)、同卷一八(大八八七b)にも出づ。
- (15) 天地に先んじて……『莊子』大宗師篇第六に「夫れ道は、情のはたらき有り、はたらきの信しは有るも、為すこと無く形無し。伝うべくして受くべからず。得べくして見るべからず。自ずから本づき自ずからに根ざし、未だ天地有らざるるときにして、古え自り以て固く存す。鬼を神にし、帝を神にし、天を生じ地を生じ、太の極の先に在りて高しと為さず、六極の下に在りて深しと為さず。天地に先だちて生じて久しと為さず、上古より長しなえにして老しと為さず」(福永光司著『莊子 内篇』二六九頁。朝日文庫、一九七八年)などを承けたものであらう。
- (16) 漆桶を打破 中公本一五一(大九〇〇b)、一九五頁(大九〇七c) 参照。
- (17) 閑言長語 中公本一〇八(大八九二a)、二二四頁(大九一一b) 参照。

(五二) 華嚴居士周子充⁽¹⁾に示す

(1) 參禪學道、別無奇特。只要究竟生死而已。古德入道因緣、教乘極則、無非直截指示。學此道者、當見月忘指。不可以自所入處、作實法會。只如僧問趙州、如何是玄旨、州云、汝玄來多少時也。僧云、玄來久矣。州云、若不遇老僧、幾乎玄殺這屢生子。僧當下知歸。

(2) 華嚴居士周子充、夙有種性、因看妙喜竹篋子話、知得飯是米做。信得及、把得定、作得主宰、不疑佛、不疑祖、不疑生、不疑死矣。既自信不疑、更須知有向上一著。所以長沙云、百尺竿頭坐底

參禪學道は、別に奇特無し。只だ生死を究竟せんことを要すのみ。古德入道の因縁、教乘の極則、直截の指示にあらざるは無し。此の道を学ばん者は、当に月を見て指を忘るべし。⁽²⁾ 自の所入の処を以て実法の会を作すべからず。只如えは、僧、趙州に問う、「如何なるか是れ玄旨」。州云く、「汝、玄來ること多少の時ぞ」、僧云く、「玄來ること久し」。州云く、「若し老僧に遇わざれば、幾んど這の屢生子を玄殺せん」。僧、當下に歸ることを知るがごとし。⁽³⁾

華嚴居士周子充、夙に種性を有ち、因みに妙喜が竹篋子の話を看て飯是れ米做なるを知得せり。信得及し把得定し作得主宰し、仏を疑わず、祖を疑わず、生を疑わず、死を疑わず。⁽⁶⁾ 既に自信して疑わざれば、更に須らく向上の一著有ることを知るべし。所以に長沙云く、「百尺竿頭に坐する底の人、得入すと雖然も未だ真と為さず。百尺竿頭に須らく歩を進むべし。十方世界に全身を現す⁽⁸⁾」。只如え

人、雖然得入未爲眞。百尺竿頭須進步。十方世界現全身。只如百尺竿頭一步、如何進得。子充決欲進步、請緊峭草鞋。妙喜恁麼道、也是掃帚畫娥眉。子充以此軸、來求指示。撥筆一揮、以塞來命。遇明眼人、試拈出似之。必有忍俊不禁下注脚者。

(一)參禪學道は、特別のすばらしいことは無い、ただ生死を究めることが必要なだけだ。古徳が悟った機縁や釈尊の教えの究極は、ズバリと指示しないものは無い。この禪の道を学ぼうと思う者は、月を見てしまえばその指し示した指を忘れなければならない。己の門に入ったところをもつて真実の教えの理解としてはならない。たとえば次のような話がある。僧が趙州に問うた、「何が玄妙の教えか」。趙州、「おまえは玄妙になってからどれほどになる」。僧、「玄妙になってから随分になります」。趙州、「もしも老僧に遇わなかったならば、この愚か者はあやうく玄妙に殺されるところだった」。僧はすぐさま本来の家郷を知った。

(二)華嚴居士周子充は、前世から般若の種をもち、妙喜の竹篋子の話に取り組んで、飯は米からできているという真実は知ることができた。それを信じ切ることができ、しっかりと把まえることができ、主人となることができ、仏を疑わず、祖を疑わず、生を疑わず、死を疑わなくなった。自ら信じて疑わないのであれば、さらに向上の一手が有ることが知らねばならない。だから長沙が次のように言っている。「百尺の竿の頂上に居坐っている人は、門に入ることができたといつても、まだ本物ではない。百尺の竿の頂上で一步を踏み出さねばならない。そこではじめて十方世界に全身が現れるのである」。さて、その百尺の竿の頂上の一步をどのように踏み出すが問題である。子充よ、一步を踏み出さんと強く望むならば、どうか草鞋の紐をきりと結びなさい。わたしは「このことさえも粗雑な箒で繊細な眉を画くことだ」とこのように言う。子充はこの軸をもつて来て指示を求めたので、書き示して願いに応じた。はつきりと見抜く指導者に遇われたら、取り出してこれを示してごらんなさい。きつとはやる心をおさえずに注脚を下す者もあることだろう。

ば百尺竿頭の一步、如何が進得せん。子充、決して歩を進めんと欲せば、請う草鞋を緊峭にせよ。妙喜恁麼に道うも、也た是れ掃帚もて娥眉を画く、と。子充、此の軸を以て来つて指示を求む。筆を撥つて一揮して以て来命を塞ぐ。明眼の人に遇わば、試みに拈出して之れを似せ。必ず忍俊不禁にして注脚を下す者有らん。

- (1) 華嚴居士周子充 周必大（一一二六～一二〇四）、号は省齋居士、華嚴居士という。字は子充または洪道。紹興二〇年（一一五〇）の進士。孝宗の時に起居郎となり、淳熙一四年（一一八七）二月に右丞相となる。『文忠公集』二〇〇巻の著がある。『索引』巻二一一四六八頁参照。いつの法語か不明。この人の手書の『華嚴經』に大慧が跋を書いたものが、『語録』巻一一（大八五七c）にあり、『年譜』六一歳の条に載す。

- (2) 月を見て指を忘るべし 中公本一〇〇（大八九〇c）、一二五（大八九五b）、一四八頁（大八九九b）および注（37）参照。

- (3) 僧、趙州に……『趙州錄』（秋月龍琅訳注六一頁、筑摩書房、一九七二年）は多少語句の異同あり。屢生子とは、おろか者の意。

- (4) 妙喜が竹篋子の話『語録』巻二（大八五六a）に「師室中にて常に竹篋を拵げて學者に問うて曰く、喚んで竹篋と作さば則ち触れる。喚んで竹篋と作さざれば則ち背く。衆下語するも皆契わず」とある。この則は元来、『宗門統要集』巻六（東洋文庫所藏宋版三丁右）の汝州首山省念の章にあり。

- (5) 飯是れ米飯 中公本一六六（大九〇二c）、二四〇～二四一頁（大九一六a）参照。

- (6) 仏を疑わず…… 中公本一〇九（大八九二b）、一六一頁（大九〇一c）参照。

- (7) 向上の一著 一著は一手のことで、元来、碁の用語。向上とは、うえの意。

- (8) 長沙云……『景德伝燈録』巻一〇長沙景岑章（禅文化研究所本一四八頁）による。中公本一五六頁（大九〇〇c）に偈の三句目の引用がある。

- (9) 恁麼（中）本は「麼」を「掃」に誤る。

- (10) 掃箒もて娥眉…… 他の用例が見あたらないので、正確な意味不明。

- (11) 忍俊不禁 内蔵しているものがこらえきれずに出ることの意。『語録』巻九（大八四七b）にも出づ。

（五三） 湛然居士趙都監献之に示す。

此段大事因縁、從上諸佛諸祖、密密傳授。謂之正法眼藏。非以言傳言。所謂密傳者、乃當人離言說文字、直下信入、心地開通是也。心地既開通、自然頭頭上明、物物上顯。如盤走珠。日用應緣處、觸著便活鱖鱖地。雖在塵勞煩惱中、不被

此の段の大事因縁は從上の諸仏諸祖、密密傳授す。之れを正法眼藏と謂う。言を以て言を伝うるにあらず。謂わゆる密伝とは、乃ち当人の言說文字を離れて直下に信入し、心地開通する是れなり。心地既に開通すれば、自然に頭頭上に明かに物物上に顯わる。盤の珠を走らせるが如し。日用応縁の處、触著すれば、便ち活鱖鱖地なり。塵勞煩惱の中に在りと雖も、塵勞煩惱に染汚せられず。塵勞煩惱を借りて仏事を作す。淨名に云う、「塵勞の儔を如來の種と為す」とは是れなり。

塵勞煩惱染汚。借塵勞煩惱、作佛事。淨名云、塵勞之儔、爲如來種是也。若錯認方便、執著塵勞之事、便以爲如來種、則又却不是也。但除其病、而不除法。塵勞之儔、爲如來種。常如是觀察、久久自撞發關振子矣。

若し錯つて方便を認めて塵勞の事に執著して便ち以て如來の種と爲せば、則ち又た却て不是なり。但だ其の病を除いて法を除かず。塵勞の儔を如來の種と爲すと。常に是の如く觀察せば、久久にして自ら関振子を撞⁹發せん。

この一大事因縁は今までの諸仏諸祖が、親密に伝授してきたものである。これを正法眼蔵と言う。それは言葉でもって伝えるものではない。ここに言う親密に伝授するとは、その当人が言説文字を離れてズバリと信じ切り、心地を開通するということである。心地が開通すれば、自然に事事物物上にはつきりとあらわれるものである。それはあたかも円盤の中を珠が転がるように、日頃の生活の中で、触れればそのまま活^び鱗^び地と対応するのである。煩惱の中に在ると言っても、煩惱に染汚^がされず。煩惱をそのまま悟りの境界として行うのである。『浄名経』に、「煩惱の仲間は今來となる種である」というのはこのことなのである。だが、もし誤つて方便を認めて煩惱の事に執著し、それを如來となる種と思ひ込むならば、ますます駄目となる。まさに「ただその病だけを取り除いて真理を除いてはいけない」という。煩惱の仲間は如來となる種であると、常にこのように觀察していくならば、しばらくするうちに自ら関振子をパツと突き動かすことになる。

- (1) 湛然居士趙都監猷之 法語(四四)と同人。
- (2) 正法眼蔵 釈尊から伝った正しい教えの真髓の意。中公本二四〇頁(大九一五c)および注(615)参照。
- (3) 心地開通 中公本一一一(大八九二c)、一七八(大九〇四c)、一八七頁(大九〇六b)および注(122)参照。
- (4) 頭頭上に明か…… 中公本一四一(大八九八a)、一四七(大八九九a)、二〇四(大九〇九b)、二二七(大九一二a)、二二六頁(大九一二b)および注(232)参照。
- (5) 盤の珠を走らせる…… 中公本二二〇頁(大九一〇b)に出づ。
- (6) 活鱗^び地 中公本一一〇(大八九二b)、二四一頁(大九一六a)および注(108)参照。
- (7) 浄名に云う…… 『維摩経』仏道品(大正藏卷一四一五四九b)による。中公本二二二(大八九四c)、二五二(大九〇〇a)、一八四頁(大九〇五c)および注(172)参照。

- (8) 但だ其の病を除いて……『維摩經』文殊師利問疾品（大正藏卷一四—五四五a）による。『語録』卷三（大八二〇c）に出づ。
(9) 撞発（正）本は「撞」を「撞」に作る。

（つづく）

〔付記〕 前号の「訳注『裴休拾遺問』（上）」について、今号はその注を付す予定でいた。その全ての注を書いた中公本が既刊された後においても、その時点ではさらに原典などを加えてより詳細な注を付すことを予定していた。ただ、目下、課外ゼミで『禪源諸詮集都序』の訳注本を作成しており、宗密の禪関係の著述は、総合的に研究することにして、今号に「訳注『裴休拾遺問』（下）」は掲載しないことにした。このような経過になったことに対してお詫びしたい。前号では『裴休拾遺問』の校訂本の作成とその原文を公刊できたので、中公本が既刊されても、それなりに意味をもつといえよう。今回の「法語（上）」の訳注も、中公本に原文がないだけに、原文公刊の意味をもつと思われる。